和歌山市文化体育振興事業団調査報告書　第14集

太田・黒田遺跡 第33・34次発掘調査概報

1996

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

序　文

遺跡の立地する和歌山市は、和歌山県の北部に位置し、奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川によって運ばれた土砂により形成された和歌山平野を中心とした地域であります。また、太田・黒田遺跡の周辺には鳴神遺跡群、秋月遺跡など著名な遺跡が集中しており、当地域は和歌山市の歴史を考える上で大変重要な地域であるといえます。

今回の調査の結果、弥生時代の大溝、奈良時代の大溝などの重要な遺構が検出され、太田・黒田遺跡の一端を明らかにすることができました。

調査は当財団が平成８年３月から７月まで行い、ここに概要報告書をまとめたものです。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査に御協力をいただいた関係機関等及び地元の皆様、本書編集にあたり種々御教示を賜わりました先生方に厚く御礼申し上げます。

平成８年11月30日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

理事長　木下　正昭

例　　言

1．本書は、株式会社愛染蔵が和歌山市黒田80番地の１他に計画した事務所建設工事に先立つ発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、株式会社愛染蔵の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、実施したものである。第33次調査は対象面積170m²を1996年３月４日から同年3月21日までの期間で、第34次調査は対象面積160m²を1996年４月４日から４月12日、７月８日から７月29日の期間で実施した。

3．発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

【第33次調査】

和歌山市教育委員会		財団法人和歌山市文化体育振興事業団	
教育長	坂口全彦	理事長	筒井敏郎
文化振興課長	志岐忠一	事務局長	竹尻圭吾
文化財班長	森田安信	総務課長	別院　稔
学芸員	前田敬彦	事務主任	豊田忠彦（調査庶務担当）
		学芸員	北野隆亮（発掘調査担当）

【第34次調査】

和歌山市教育委員会		財団法人和歌山市文化体育振興事業団	
教育長	坂口全彦	理事長	木下正昭
文化振興課長	志岐忠一	事務局長	竹尻圭吾
文化財班長	森田安信（平成８年７月まで）	総務課長	別院　稔
	小松靖甫（平成８年８月から）	事務主任	酒井　剛（調査庶務担当）
学芸員	前田敬彦	学芸員	北野隆亮（発掘調査担当）
		学芸員	髙橋方紀（　〃　）

4．遺跡・遺構及び本概報掲載の遺物写真撮影は北野・髙橋が行った。

5．本書の執筆は発掘調査担当の北野、髙橋のほか同財団学芸員奥村薫が分担し、編集は北野が行った。なお、「３.太田・黒田遺跡の既往の調査」については和歌山市教育委員会学芸員前田敬彦が執筆した。各執筆分担の文責は目次に示した。

6．写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

7．概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜った。ここに記して感謝の意を表します。

本文目次

1．調査の契機と経過……（北野隆亮）……1

2．位置と環境……（髙橋方紀）……2

3．太田・黒田遺跡の既往の調査……（前田敬彦）……4

4．調査の方法と経過……（北野）……6

（1）調査の方法

（2）調査の概要

5．第33次調査

（1）遺構……（北野）……8

（2）遺物……（髙橋）……10

6．第34次調査

（1）遺構……（北野）……11

（2）遺物……（奥村薫・髙橋）……14

7．まとめ……（北野）……24

（1）弥生時代の大溝について

（2）奈良時代の大溝について

（3）平安時代の土地利用について

報告書抄録……26

図版目次

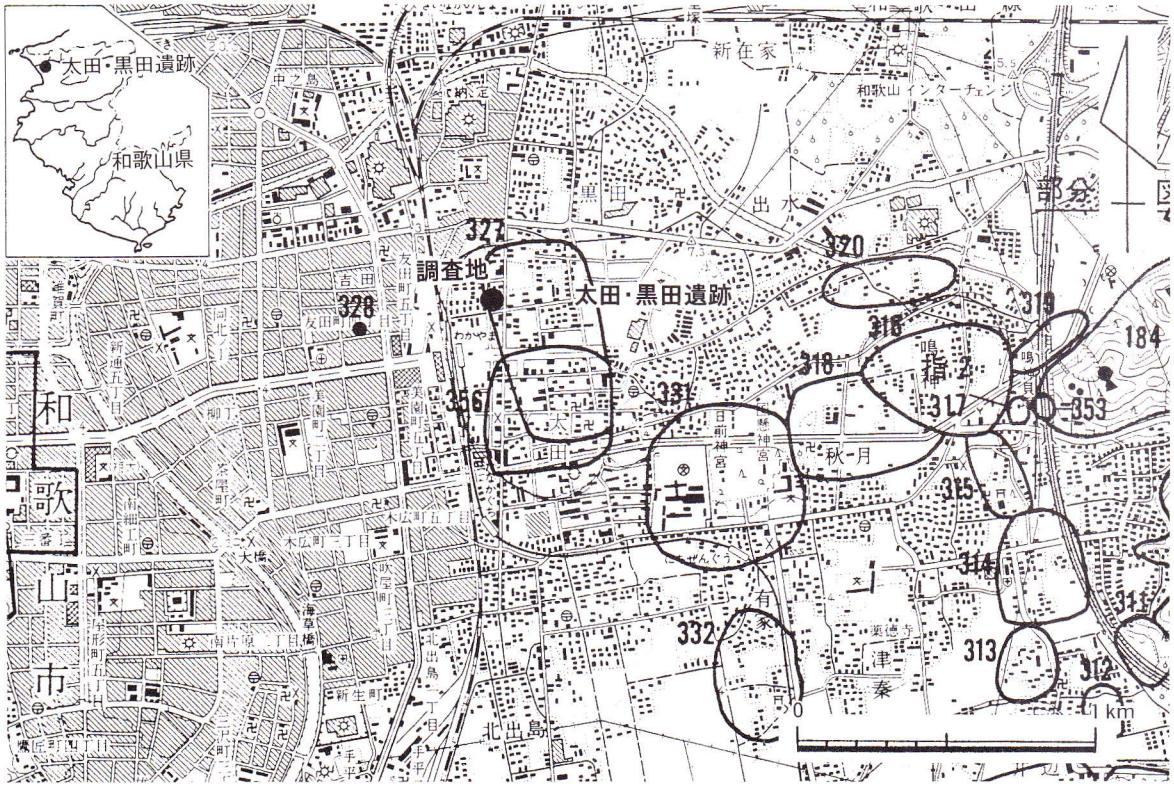
図版１　第33次調査　調査前の状況（南から）、第１・２区掘削状況（南西から）
図版２　第33次調査　第１区全景（南から）、第２区全景（南から）
図版３　第33次調査　第１区SD-8（西から）、第１区SD-8土層堆積状況（南から）
図版４　第33次調査　第１区SD-3（西から）、第２区SD-3（西から）
図版５　第33次調査　第１区SD-2（西から）、第２区SD-2（西から）
図版６　第33次調査　第１区SD-1（西から）、第２区SX-1他（東から）
図版７　第34次調査　G1～G4区掘削状況（南から）、G1～G4区（北から）
図版８　第34次調査　G1区全景（南から）、G2区全景（南から）
図版９　第34次調査　G3区全景（西から）、G4区全景（南から）
図版10　第34次調査　第３区全景（西から）、第３区全景（東から）
図版11　第34次調査　第３区ＳＤ-8（南西から）、第３区ＳＤ-8土層堆積状況（南西から）
図版12　第34次調査　第３区ＳＤ-21（西から）、第３区ＳＤ-21（東から）
図版13　第34次調査　第３区ＳＤ-21土層堆積状況(西から)、第３区ＳＤ-21遺物出土状況1(西から)
図版14　第34次調査　第３区ＳＤ-21遺物出土状況2(南から)、第３区SD-18、SD-5、SD-20(東から)
図版15　第34次調査　第３区SD-3土層堆積状況（西から）、第３区近代埋甕（南から）
図版16　遺物　第33次調査出土遺物、SD-8出土土器
図版17　遺物　SD-21b出土土器、SD-21a出土土器
図版18　遺物　SD-21a出土土器、SD-18出土土器
図版19　遺物　SD-3出土土器
図版20　遺物　SD-3出土遺物、SD-3出土土器、竈
図版21　遺物　石器
図版22　遺物　石器

1．調査の契機と経過

株式会社愛染蔵が和歌山市黒田80－１番地他に計画した事務所建設用地が『和歌山市埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された太田・黒田遺跡（遺跡番号356）の範囲内に相当することから、和歌山市教育委員会が指導を行い、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて発掘調査を実施する事となった。調査地は、標高約3.7mを測る沖積平野上にあり、太田・黒田遺跡の西端部に位置する（第１図、図版１）。

周辺の調査はこれまでに調査地西側約150m地点で第１次調査の１区画が太田・黒田遺跡調査団により調査され、調査地南東側約100m地点で和歌山市教育委員会が第19次調査を行った。また、調査地の南側約150m地点では、第12次調査が和歌山市教育委員会、第22次及び第26次調査が本財団により行われている。第１次調査では、古墳時代の溝、第19次調査で室町時代の大規模な濠状遺構、弥生時代・古墳時代のピット・土坑・溝などが確認されている。また、第12次調査では弥生時代中期の井戸、古墳時代前期の土坑、室町時代の瓦溜め・池状落ち込み遺構（溝？）など、第22次調査では弥生時代中期の竪穴住居、室町時代の大溝、第26次調査では弥生時代前期の大溝、中期の水田遺構、室町時代の大溝などが検出されている。以上の調査成果から、調査地周辺部では弥生時代から古墳時代、室町時代の遺構が展開していたことが明らかにされている。

調査は試掘調査として第33次調査を対象面積170m²、1996年３月４日から同年３月21日までの期間で実施した。調査の結果、弥生時代の溝、奈良時代の溝などの遺構及び弥生土器などの遺物を検出したことから、本調査として第34次調査を行った。第34次調査は対象面積160m²を1996年４月４日から４月12日、７月８日から７月29日の期間で実施した。



第１図　調査位置図

2．位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置しており、北は和泉山脈を境として大阪府泉南郡岬町・阪南市、東は和歌山県那賀郡岩出町・貴志川町、南は海南市に隣接する地域である。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を流れて紀伊水道に注いでおり、その過程で運ばれた土砂により形成された沖積平野が和歌山平野である。今回調査を行った太田・黒田遺跡は、数多くの遺跡が分布する紀ノ川南岸の和歌山平野の中でも微高地上に位置するものである（第２図）。

次に周辺の遺跡をみると、旧石器時代では、紀ノ川北岸の山麓部において鳴滝遺跡や西ノ庄地区遺跡からナイフ型石器が出土している。また、紀ノ川南岸では、岩橋丘陵東麓に位置する総網谷・頭陀寺遺跡等でナイフ型石器が採集されている。縄文時代の遺跡では、緩斜面上に位置する鳴神貝塚や禰宜貝塚・吉礼貝塚が知られている。国の史跡に指定されている鳴神貝塚からは縄文時代中期から晩期の土器が多く出土している。その貝層に海水産の貝殻が多くみられることから、当時は岩橋山塊西麓あたりまで海岸線が延びていたものと推測される。弥生時代にはいり、紀ノ川による堆積作用は陸化を進めていくが、前期においては紀ノ川南岸の日前宮周辺の微高地に居住域が認められる。代表的な遺跡に太田・黒田遺跡があり、前期・中期を中心とした竪穴住居や土坑、水田址などが検出され、多量の土器等が出土している。中期では紀ノ川北岸に宇田森遺跡、北田井遺跡、西田井遺跡などの集落が営まれるようになる。後期になると平野部に顕著な集落がなく、太田・黒田遺跡でも集落が営まれなくなる。代ってその周辺の丘陵部に滝ヶ峰遺跡、橘谷遺跡などの高地性集落が出現する。古墳時代では、当遺跡の東側に位置する鳴神遺跡群で多数の方形竪穴住居跡が検出されている。また、鳴神Ⅱ遺跡から幅７～８ｍ、深さ３ｍ程の用水路と考えられる大溝、鳴神Ⅴ遺跡から前期の水田区画遺構が検出されている。この地域の丘陵上に古墳が築造されはじめるのは４世紀末あるいは５世紀初頭であり、花山丘陵上に前方後円墳９基を含む90基あまりの古墳が確認される。その後、周辺の岩橋山塊に７世紀初頭まで頻繁に古墳が造られるようになる。それらは岩橋千塚古墳群と呼ばれ、総数約700基を数える。平野部においては、前期から７世紀初頭まで鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡や秋月遺跡などで微高地上に前方後円墳、円墳、方墳などが築造される。歴史時代になると、当遺跡から東700ｍの秋月の地に鎮座する日前国懸神宮がすでに日本書紀に記されている。この日前宮一帯は、条里制土地区画の痕跡を良好に留めている地域であり、県内でも最大の規模をもつこの条里は河南条里と呼ばれている。なお奈良時代から平安時代にかけての遺物が、周辺の鳴神遺跡群の発掘調査において多く出土しており、日前宮との関係が注目されるところである。また、今回の調査地の南には太田城跡の存在が推定されている。太田城は、豊臣秀吉による水攻めがよく知られるところであるが、その正確な位置及び規模は不明である。また、水攻めの際には大規模な堤防を築き、宮井・小倉井の用水を引き入れたといわれる。この堤防も、現在では出水の地にその姿をわずかにとどめるだけで、太田城も太田の地に「城跡」という小字を残すのみである。

参考文献
和歌山県史編さん委員会　『和歌山県史』　和歌山県　考古資料　1983年
和歌山市史編さん委員会　『和歌山市史』第１巻　和歌山市　1991年
㈶和歌山市文化体育振興事業団　『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』　1995年

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	太田・黒田遺跡	弥生～近世	15	田屋遺跡	弥生～古墳	29	花山古墳群	古墳
2	太田城跡	安土・桃山	16	西田井遺跡	弥生～中世	30	津秦遺跡	弥生
3	大谷古墳	古墳	17	北田井遺跡	弥生～古墳	31	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳
4	楠見遺跡	古墳	18	本願寺跡	中世～	32	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳
5	国有本遺跡	弥生～古墳	19	鷺の森遺跡	弥生～古墳	33	井辺遺跡	弥生～古墳
6	有本銅鐸出土遺跡	弥生	20	和歌山城跡	近世	34	井辺前山古墳群	古墳
7	法然寺遺跡	弥生	21	秋月遺跡	古墳・中世	35	大日山Ⅰ遺跡	古墳～平安
8	西辻遺跡	弥生	22	鳴神Ⅵ遺跡	古墳	36	岩橋千塚古墳群	古墳
9	六十谷遺跡	縄文～弥生	23	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	37	寺内古墳群	古墳
10	和田遺跡	弥生～古墳	24	鳴神Ⅳ遺跡	古墳	38	神前遺跡	弥生～古墳
11	川口遺跡	弥生～古墳	25	鳴神Ⅲ遺跡		39	和田古墳群	古墳
12	紀ノ川銅鐸出土遺跡	弥生	26	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	40	和田岩坪遺跡	弥生～古墳
13	府中Ⅳ遺跡	弥生～古墳	27	鳴神貝塚	縄文～弥生	41	和田遺跡	弥生
14	府中Ⅱ遺跡	弥生	28	音浦遺跡	古墳	42	三田古墳群	古墳

第２図　太田・黒田遺跡周辺の遺跡分布図

3．太田・黒田遺跡の既往の調査

本遺跡については、昭和43(1968)年の市の委託を受けた調査会組織による発掘調査以来30次を越える調査が実施され、調査成果が蓄積されつつある。既往の調査のうち第1次から第25次調査の概要については、既刊の概要報告書[1]に記述されているので、ここでは割愛して、第26次から第32次発掘調査の概要について記述する（第３図)。

第26次調査　1995(平成７)年４月から５月にかけて財団法人和歌山市文化体育振興事業団が専門学校建設に伴い発掘調査を実施したものである。調査地は、和歌山市太田383番地であり、調査面積は約370m²であった。弥生時代の遺構としては、標高2.2～2.8mにおいて確認された３面の水田面がある。調査面積にもより完掘はできなかったが、一部に畦畔・水口とみられる遺構も検出された。時期的には弥生時代第Ⅱ様式～第Ⅲ様式期のものであり、県下において最古の水田遺構として注目された。また、調査区の南東から北西へ対角線状に横切る弥生時代の大溝(幅約2.3m、深さ約1.2m、長さ24m以上)からは、アカガシ亜属の広鍬の鍬身部分が出土し、中世末の大溝(幅６m以上、深さ0.95m、長さ10m以上)からは鉄砲玉・宋銭が出土している。

第27次調査　1995(平成７)年５月から６月にかけて和歌山市教育委員会が、集合住宅建設に伴い発掘調査を実施したものであり、調査地は和歌山市太田314－1、314－6番地で、調査面積は75m²であった。調査により弥生時代の遺物包含層と江戸時代の土坑が確認された。土坑は、縦90cm、横70cm以上の方形であり、深さは30cm程度であった。

第28次調査　1995(平成７)年５月から６月にかけて和歌山市教育委員会が、集合住宅建設に伴い発掘調査を実施したものであり、調査地は和歌山市太田244－1番地、調査面積は約50m²であった。弥生時代の溝、土坑、古墳時代のピット、江戸時代の土坑が確認された。弥生時代の土坑の内部には完形の甕がやや斜位に据えられており、埋葬施設と推定された。

第29次調査　1995(平成７)年７月に和歌山市教育委員会が、駐車場案内システム設置工事に伴い調査を実施したものであり、調査地は和歌山市太田297番地地先、調査面積は５m²であった。現況は、国道24号バイパスの中央分離帯部分であったが、道路面より約１m下層において遺物包含層が確認された。包含層の下面において、直径１m、深さ70cmの土坑が1基確認された。土坑内より黒色土器・土師器が出土し、平安時代の遺構と判断された。

第30次調査　1995(平成７)年12月に和歌山市教育委員会が、事務所建設に伴い発掘調査を実施したものであり、調査地は和歌山市太田355－1番地、調査面積は18m²であった。地表から約90cm下層において厚さ５cm程度の須恵器を含む希薄な包含層が確認され、包含層下面においても幅約1.3m、深さ0.75mの東西方向にのびる溝が検出された。溝埋土の最下層より弥生土器が出土した。

第31次調査　1996(平成８)年２月から３月にかけて財団法人和歌山市文化体育振興事業団が、公共下水道管埋設工事に伴い、和歌山市太田地内において実施したものであり、調査面積は６ケ所のトレンチ部の合計で約35m²であった。弥生時代としては、第15次調査時の前期の住居跡の一部を再発掘し、現況における住居跡の位置を把握することができたほか、中期の土坑・溝状遺構が検出された。調査により主として検出されたのは中近世の遺構・遺物であり、溝や石積遺構が確認された。

第32次調査　1996（平成８）年１月に財団法人和歌山市文化体育振興事業団が、寺院改築工事に伴い、和歌山市太田531番地において発掘調査を実施したものであり、調査面積は約10㎡であった。工事による掘削計画との調整により深掘はできなかったが、標高3.8m前後において室町時代の整地層を確認した。また、出土遺物は、弥生土器・石器・須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・備前焼・肥前陶器・堺焼・土人形・瓦と多種にわたっている。

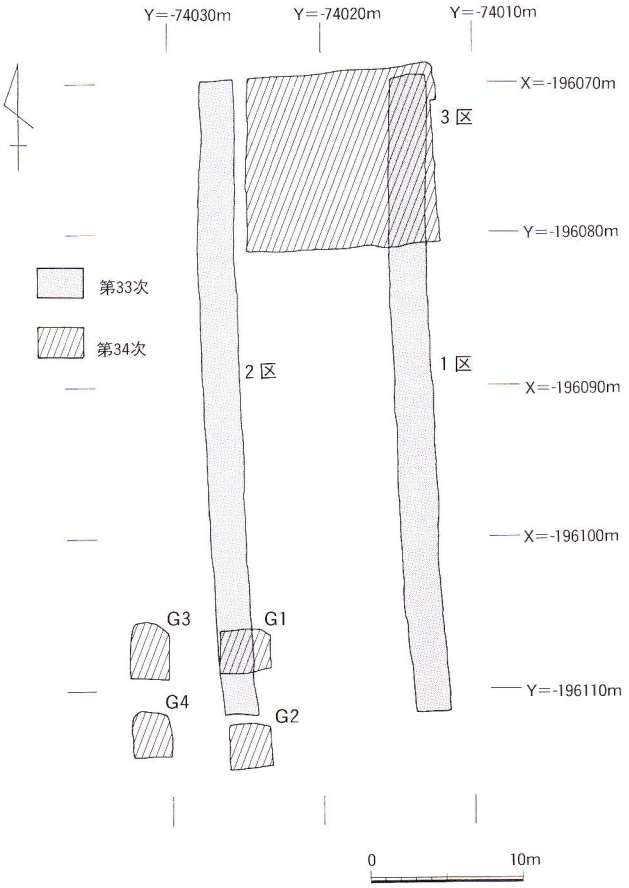
註
1）『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』財団法人和歌山市文化体育振興事業団（平成7年11月17日発行）

第３図　既往の発掘調査区域
（黒塗部分は主たる調査地、斜線部分は調査対象地を示す）

4．調査の方法と経過

（1）調査の方法

調査は、試掘調査として第33次調査を3月4日から3月21日の期間で、事務所建設工事予定範囲内において実施した（図版1）。幅約2m長さ約42mの南北に細長い形の調査区を東西に2箇所、合計面積約170m²を設定し、東側から第1区、第2区と呼称した。まず、和歌山市教育委員会の立会のもと表土の重機掘削が行われ、その後、当財団が人力による発掘調査を実施した。



第4図　調査地区割図

調査の結果、弥生時代の溝、奈良時代の溝などの遺構及び弥生土器などの遺物を検出したことから、本調査として第34次調査が市教育委員会により設定された。第34次調査はまず、調査対象地南西端部に一辺2m強の調査区を4箇所、合計面積約20m²を設定し、北東調査区からG1～G4区と呼称した。G1～G4区の調査は4月4日から4月12日の期間で実施した（図版7）。G1区とG2区において溝などの遺構を検出したが、G3区とG4区では明確な遺構は検出されなかった（図版8・9）。その後、調査対象地北東端部において、一辺約12m、面積約140m²の調査区を設定した。この調査区は第3区と呼称することとし、7月8日から7月29日の期間で実施した。なお、第34次調査は第33次調査と同様、市教育委員会の立会のもと表土の重機掘削が行われ、その後、当財団が人力による発掘調査を実施したものである。なお、第1～3区及びG1～G4区の調査対象地内における位置関係は調査地区割図（第4図）のとおりである。

調査は、機械力によって旧地表面である第1層（水田耕土）及び第2層（床土）、第3層（2.5Y 5/3（黄褐）シルト）までを掘削し、第4層（10YR5/6(黄褐)シルト）以下を人力により掘削した。遺構検出は第1・2区及びG1区～G4区を北野が、第3区を北野・高橋が行った。検出した遺構については土層観察用ベルトを原則的に1箇所以上設けることとし、2層以上の堆積が認められたものについては分層し写真撮影及び実測図を作成した。土層の色調及び土質観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。遺跡の水準は国家水準点及び和歌山県水準点を基準とした。平面実測は国土座標軸を基準とした値を使用した。平面実測図、調

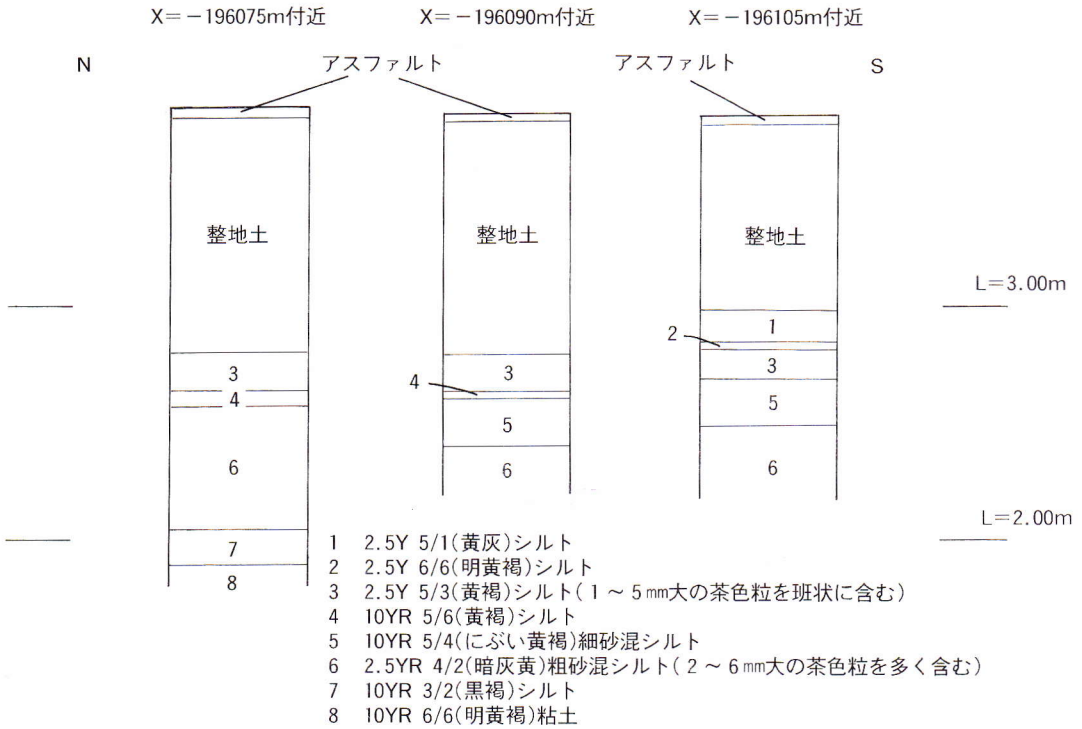
査区壁面土層図及び遺構の土層堆積状況図については１/20の縮尺で全て手実測で実施した。なお、遺構内の遺物出土状況図及び特殊遺構については１/10の縮尺で実測図を作成した。

（２）調査の概要

調査地の基本的な土層堆積状況は現地表であるアスファルト以下、現代の整地土などが合わせて約70～90cmの厚みを持ち、本来的な地表面であったとみられる水田耕土（第１層）が約20cm、床土（第２層）が５～10cmの厚さで堆積する。その下の堆積は上から第３層（2.5Y5/3(黄褐)シルト）が約15cm、第４層（10YR5/6(黄褐)シルト）が０～10cm、第５層（10YR5/4(にぶい黄褐)粗砂混シルト）が０～30cm、第６層（2.5Y4/2(暗灰黄)粗砂混シルト）が40cm以上の厚さで堆積する。２区北端部において、一部深く掘削したが、第６層の下層に第７層（10YR3/2(黒褐)シルト）が約20cm、第８層（10YR6/6(明黄褐)粘土）が10cm以上の厚さでみられ、第６層が北側に向かって深く落ち込んでゆく状況を観察した。これは第７層堆積後の谷状地形であるものとみられる（第６図）。

第３層は平安時代の遺物を含み、その堆積状況から水田耕土であると考えられ、第４層はその床土に相当する層であるとみられる。第３・４層を掘削・除去後の第５・６層上面（同一面）において弥生時代中期から平安時代までの遺構面を検出した。また、調査区の一部に深掘調査坑を設定し精査した結果、第５・６層は弥生時代中期の遺物を包含すること、第７・８層は無遺物層であることなどを確認することができた（第５図）。

検出した遺構の概要は、調査区北東端部において弥生時代中期の溝SD-８・SD-21、奈良時代の溝SD-3、調査区南端部で平安時代の溝SD-2などを検出した。



第５図　調査地土層柱状模式図

5．第33次調査

（1）遺構

遺構は第５・６層上面（同一面）を検出面とする遺構面において検出した溝・土坑などで、弥生時代から江戸時代までの時期のものがある（第６図、図版２）。遺構面の標高は2.6m～2.7mを測る。以下、時代順に主要な遺構を説明する。なお、SD－21は第34次調査で明確に検出することができたため、次項でまとめて記述する。

弥生時代の遺構

SD－８　第１区及び第２区の北側で検出した。幅約1.0m、深さ約50cm、検出長約5.0mの規模を測る。溝の方向は北東から南西である（図版３）。

古墳時代～奈良時代の遺構

SD－５　第１区及び第２区の北側で検出した。SD-3の北側に位置する。幅約1.20m深さ約40cmを測る。溝の掘削方向はSD-3と同一方向である。

SD－３　第１区及び第２区の北側で検出した。幅約5.0m、深さ約50mの規模を測る。溝は東西方向に掘削されており、西側でやや北にふっている。流路方向は東から西である。埋土は砂が主体であり、多量の遺物が出土した。最終埋没の時期は出土遺物からみて奈良時代であると考えられる。

SX－１　２区南端部で検出した。平面形は不整形な方形を呈し、一辺4.0m以上、深さ15cmの規模を測るものである（図版６）。

平安時代の遺構

SD－２　第１区及び第２区の調査区南端から北に約12mの位置で検出した。幅2.5m、深さ25cmを測る。溝は東西方向に掘削されており、流路方向は東から西である。用水路と考えられる（図版５）。

江戸時代の遺構

SD－１　第１区及び第２区の南側で検出した。最大幅約2.0m、深さ約20cmを測る。溝は東西方向に掘削されており、SD-2と同一方向である。SD-2と同様に用水路と考えられる（図版６）。

SK－１　第２区南側で検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径1.6m、短径1.3m、深さ40cmを測る。

時期不明の遺構

以下の遺構は、遺物をほとんど出土しなかったため時期不明の遺構として記述する。なお、SD-10、SK-4は第１区、SD-11、SD-6、SK-3、SK-2は第２区で検出したものである。

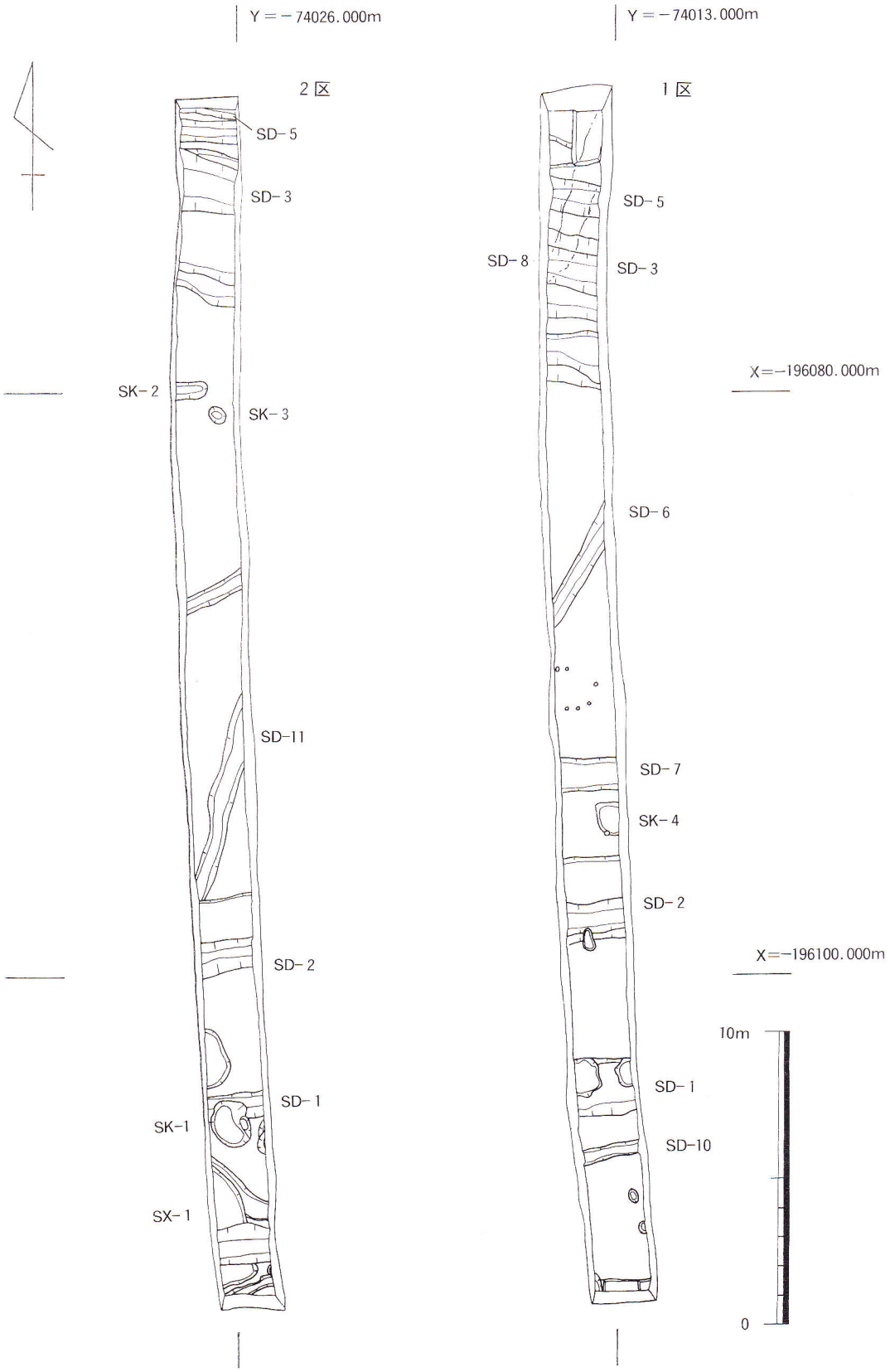
SD-11　第２区中央で検出した。最大幅80cm、深さ10cmの浅い規模のもので、北東から南西方向に掘削された溝である。

SD-10　SD-1の南側約１mの距離にSD-1に平行して掘削されたものである。幅50cm、深さ20cmの規模を測る。

SD－６　第２区中央で検出した。幅70cm、深さ10cmを測る北東から南西方向の溝である。

SK－４　SD-7とSD-2の間で検出した。平面形が長径1.0m、短径80cmの不整円形のもので、深さが約10cmを測る。

SK－３　直径60cm、深さ約10cmを測る平面形が円形の土坑である。



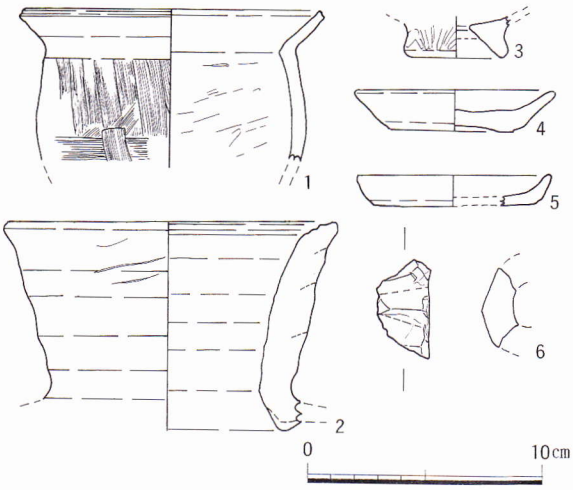
第６図　第33次調査遺構全体平面図

SK-2　南北60㎝、長さ1.1m以上、深さ約10㎝を測る溝状の土坑である。

（2）遺物

遺物は、弥生時代の土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の黒色土器、鎌倉時代の瓦器、江戸時代の陶磁器類などが出土した。なお、遺構出土の遺物のうちSD-21、SD-8、SD-3出土遺物と石器については第34次調査の項で記述する。

遺物の出土量はコンテナ約7箱を数えた。以下、弥生時代の土器、古墳時代の土器、平安時代の土器、フイゴ、金属製品の順に記述を行う。



第7図　遺物実測図1

弥生時代の土器（第7図、図版16）

SX-1から甑（3）の底部が1点出土している。外面には磨きが施されており、その形態から鉢の転用品と思われる。底径は約4㎝、底部の穿孔は直径1.1㎝を測る。

古墳時代の土器（第7図、図版16）

1はSD-5から出土したもので、外面は赤褐色・内面は褐色を呈する土師器の甕である。長石・石英・片岩が多く含まれており、外面は丁寧なタテハケ、内面は板状工具によるケズリが施されている。口径は12.5㎝で、ハケメ原体は10～12条と思われる。2は第1区の2～3層出土の遺物で、須恵器の壺の口縁部である。全体的に作りが荒く、器壁の厚さは1.7㎝と非常に肉厚である。体部と口縁部の接合時における粘土の貼付痕が明瞭に残る。ロクロは左回りで、内外面観察により左方向への粘土紐の巻上げが確認できる。

平安時代の土器（第7図、図版16）

SD-2から黒色土器椀、土師器皿などが出土したほか、第3層からも須恵器、黒色土器などが出土した。

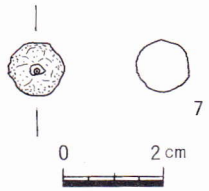
4はSD-2、5は包含層からの出土で、いずれも土師器の小皿である。共に口径は8㎝ほどで、底部には糸切り痕がみえる。

フイゴ（第7図、図版16）

2区の第3層からフイゴの羽口（6）が1点出土している。外面は明灰色を呈し、ヘラケズリによる面取りが施されている。内面は熱を受けて橙褐色に変色している。胎土は緻密であり、復原口径2.2㎝を測る。

金属製品（第8図、図版16）

金属製品では、火縄銃の玉である鉛玉（7）が2区のSD-1から出土している。直径は1.1㎝、重さは6.95gを測る。鉛の注入口と思われる跡がみられる。



第8図　遺物実測図2

6．第34次調査

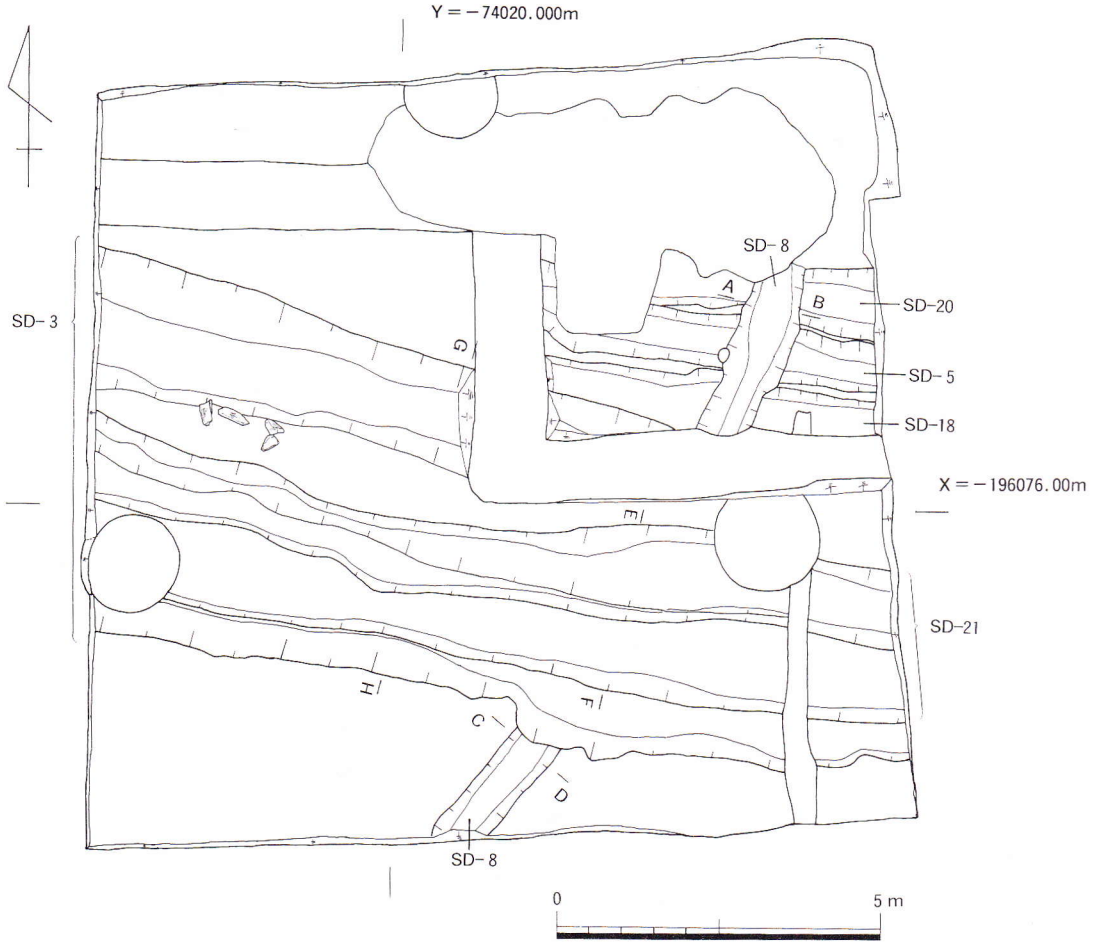
（1）遺構

主要な遺構は第３区の第５・６層上面（同一面）を検出面とする遺構面において検出した溝などで、弥生時代から奈良時代までの時期のものがある（第9図、図版10）。遺構面の標高は2.6m～2.7mを測る。以下、時代順に説明する。

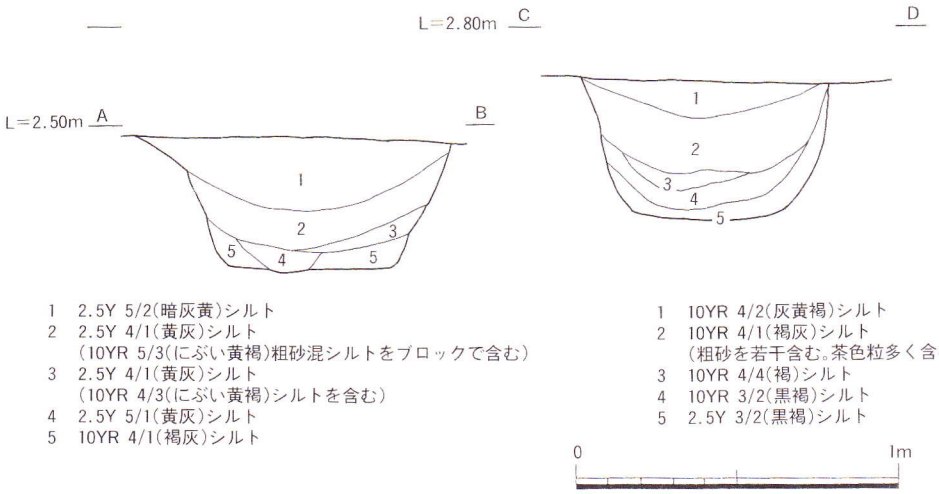
弥生時代の遺構

弥生時代の遺構はSD-8、SD-21、SD-18、SD-20がある。

SD-８　調査区の北東端部から調査区南端中央部にかけて検出した（第９図、図版11）。幅約1.0m、深さ約50cmの規模を測るものである。SD-21、SD-３などの他の溝に分断され、北側と南側に断続的に検出したが、延長約11.0mを測る。溝の掘削方向は北東から南西であり、北側断面A－Bでは底面の標高が2.0m、南側断面C－Dでは標高2.2mを測り、南から北方向に傾斜するものである。土層堆積状況は堆積したシルトを５層に分層することができたが、南北の断面で色調が異なり、北側断面A－Bでは黄灰色系であり、南側断面C－Dでは褐灰から黒褐色系となる（第10図、図版11）。



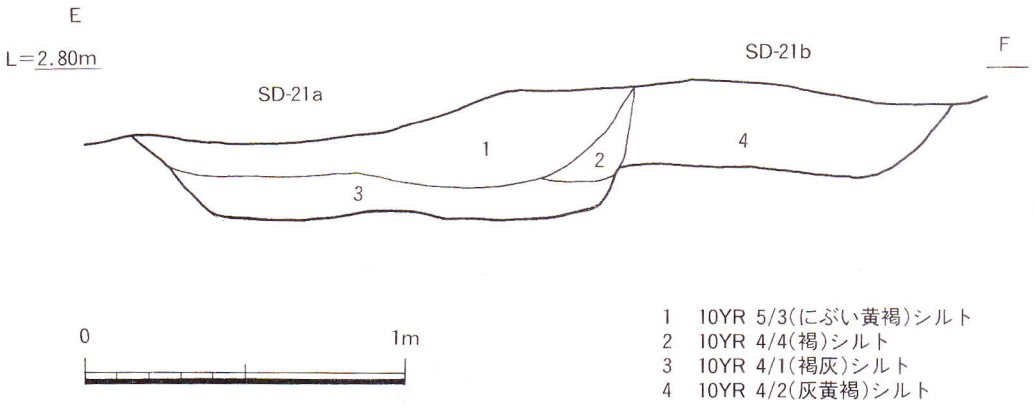
第９図　第34次調査第３区遺構全体平面図



第10図　SD－8土層断面図

SD–21　調査区の南東端部から調査区西端中央部にかけて検出した東西方向に掘削された溝である。上面を重なって掘削されたSD－3に削られているが、幅2.6m、深さ40cmの規模を測り、東西延長約13.0mを検出した（第9図、図版12）。この溝は本来、南半分を掘削したものであったが、埋没後北側に再掘削されたものである。北側の再掘削部分をSD–21a、南側をSD–21bとした。SD–21bは北側肩部分を再掘削により壊されているため正確な規模は不明であるが、幅1.3m以上、深さ30cmを測るものである。SD–21aは幅1.6m、深さ40cmの規模を測る。双方共に底面の標高から、西から東へと流路方向を持ったものと考えられる。土層堆積状況については、SD–21bは灰黄褐色のシルト1層で、SD–21aは黄褐色のシルトの他3層に分層することができた（第11図、図版13）。

SD–18　調査区の東側の中央部で検出した東西方向の溝である（第9図、図版14）。南側の肩部をSD–3に壊されており、幅1.0m以上、深さ20cmを測る。調査区東端から中央部まで延長約5.0m検出した。遺構埋土は黄褐色系のシルトが1層である。

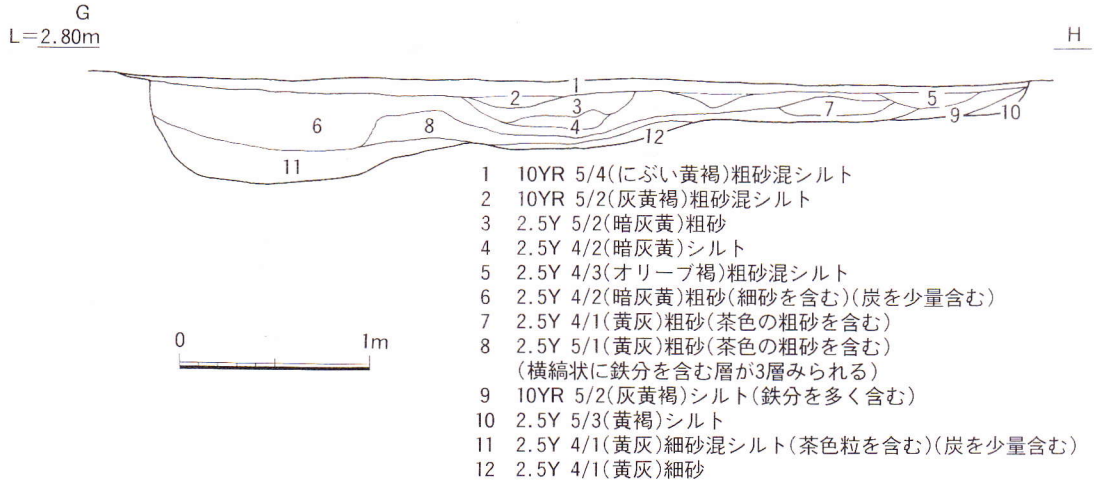


第11図　SD–21土層断面図

SD-20　SD-18の北側約1.0mの距離にSD-18とほぼ平行して掘削された溝である（第9図、図版14）。幅1.0m、深さ20cmの規模を測るもので、調査区東端から西に約3.5m検出し、その西は撹乱坑により壊されている。SD-18と遺構埋土が類似するものである。

奈良時代の遺構

SD-3　調査区の東端から西端にかけて、幅約5.0m、深さ約50cmの規模で東西延長約13.0mを検出した（第9図、図版10）。溝は東西方向に掘削されており、西側でやや北にふっている。底面の標高から、東から西へと流路方向を持ったものと考えられる。土層堆積状況について、12層に分層することができた（第12図、図版15）。遺構埋土は粗砂が主体であり、多量の遺物が各層から出土した。堆積状況から、再掘削が幾度も行われ、その度に幅及び深さが変化したものであると考えられる。この溝の最終埋没の時期は出土遺物からみて奈良時代後期であるといえる。



第12図　SD-3土層断面図

SD-5　調査区北東部のSD-18とSD-20に挟まれた位置に検出した溝である（第9図、図版14）。幅約1.2m、深さ約40cmの規模を測る。調査区東端から西に延長5.5m検出し、その西は撹乱坑により壊されている。溝の掘削方向は東西方向であるが、調査区中央付近でやや北側に曲がるものである。

検出した遺構はこの他、近代のものとみられる埋甕遺構1基がある。埋甕遺構は調査区中央やや北東寄りに検出した（図版15）。甕内埋土から陶磁器類、鉄製品、ガラス製品などが出土した。

（2）遺物

遺物は、弥生時代の土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の黒色土器、鎌倉時代の瓦器、江戸時代の陶磁器類などが出土した。

以下、主要な出土遺物について、弥生時代の土器、古墳時代～奈良時代の土器、石器、その他の遺物の順に記述する。

弥生時代の土器

SD-8、SD-21、SD-18から弥生土器が出土した他、遺物包含層（第4層）などから石器類が出土した。

SD-8出土土器（第13図、図版16）

8・9は壺である。8は頸部に貼り付け突帯をもつものである。肩部の外面にヘラミガキ調整が施されているが磨滅のため単位は不明瞭である。頸部内面はユビオサエの痕跡がみられる。また肩部内面には補強のため粘土を貼り付けたと思われる部分がある。9は底部で、外面はナデののちハケ調整が施されている。外底部と内面は、剥離のため調整は不明である。復元底径10.6cmを測る。

10は甕の蓋である。内外面の調整は、剥離のため観察できなかったが、内面の天井部にクモの巣状ハケの痕跡がみられる。復元底径15.2cm、残存器高8.0cmを測るものである。

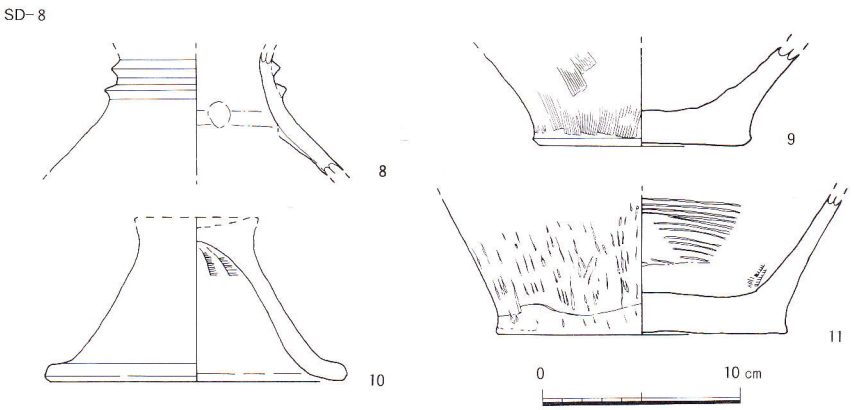
11は甕の底部である。外面はヘラケズリ、内面は粗いハケと細かいハケで調整されており、内底部はハケ調整をナデ消している。外面にヘラケズリの痕跡が見られることから、紀伊型甕とみられる。復元底径は15.0cmを測る。

以上の出土土器からSD-8は弥生時代中期前半の遺構であるといえる。

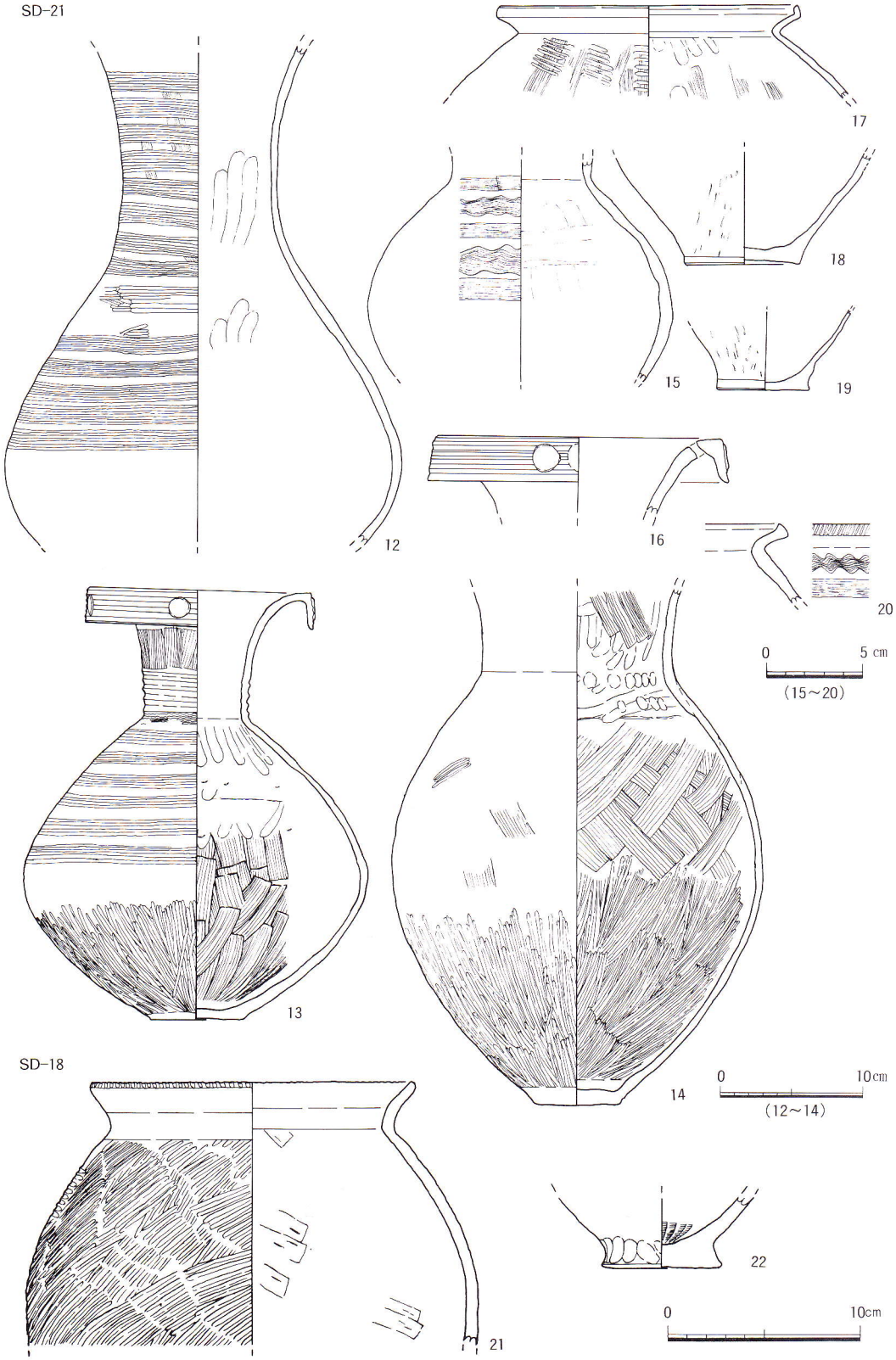
SD-21出土土器（第14図、図版17・18）

12はSD-21bから、13～20はSD-21aから出土したものである。

12～16は壺である。12は口縁部と底部を欠くものである。外面調整は、縦方向のハケが施された後、櫛描直線文が頸部に8条と体部に5条施されている。また肩部及び体部下半部にヘラミガキを施すものである。内面調整は、剥離のため不明瞭であるが縦方向のユビナデがみられる。13は広口壺で、口縁垂下部に6条の凹線ののち、円形浮文を6ヶ所貼り付けている。外面の調整は、頸部全



第13図　遺物実測図3


SD-21
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
SD-18
0
5 cm
(15～20)
0
10cm
(12～14)
0
10cm

第14図　遺物実測図 4

体にタテハケののち、下半部に4条の凹線文を施し、肩部は波状文がみられる。また体部上半部は6条の櫛描直線文、体部下半部から底部にかけて縦方向のミガキがみられる。内面の調整は、肩部から体部の上半部に縦方向のナデ、体部の下半部から底部にかけてハケ調整がみられる。口径16.0cm、底径6.6cm、器高30.6cm、体部最大径24.6cmを測る。14は口縁部を欠くものである。外面調整は体部上半部において部分的にハケとヘラミガキ調整がみられる。また体部下半分は縦方向のミガキが施される。内面は頸部にユビナデののちハケ、頸部から肩部にかけてユビオサエ、体部上半部は丁寧な斜め方向のハケ、体部下半部に縦方向のミガキが施される。内底面は不定方向のハケがみられる。復元底径6.0cm、体部最大復元径26.5cmを測るものである。15は口縁部と底部を欠くものである。外面調整は、頸部から体部にかけて櫛描直線文と波状文が交互に施されている。内面は、縦方向ののち横方向のナデがみられる。体部最大径は、16.2cmを測る。16は広口壺の口縁部で、口縁垂下部に5条の擬凹線ののち、円形浮文を貼り付けている。また口縁垂下部より内側約1.4cmの位置に径0.4cmの穿孔がみられる。内外面ともに磨滅が著しいため調整は観察できなかった。復元口径は15.0cmを測る。

17～19は甕である。17は体部中位より下を欠くものである。口縁部を外反させ、端部を上に摘み上げるものである。外面はタタキのちハケ調整が施されている。肩部内面はユビオサエ、体部内面はナデのちハケがみられる。復元口径は15.8cmを測る。18・19は底部である。18はやや上げ底で、外面にヘラケズリ調整がみられ、底径6.0cmを測るものである。19の外面は、下から上方向のヘラケズリ、外底部中央にも同様の痕跡がみられる。底径は4.2cmを測る。18・19は、外面にヘラケズリ調整が施されることから紀伊型甕の底部とみられる。

20は鉢の口縁部である。口縁部を外反させてから、端部を上に摘み上げるもので、口唇部に刻目文、肩部から体部にかけて波状文と櫛描直線文を観察することができる。

以上の出土土器からSD-21は弥生時代中期後半の遺構であるといえる。

SD-18出土土器（第14図、図版18）

21・22は甕である。21は外面肩部から体部にかけて、タタキ調整を施すものである。口縁部は、口唇部に刻目文がみられる。内面には部分的にヘラケズリの痕跡がみられ、復元口径16.8cm、体部最大径23.9cmを測る。22は底部である。外面はナデとユビオサエ、内底部にはクモの巣状ハケがみられる。復元底径6.4cmを測るものである。

以上の土器からSD-18は弥生時代後期後半の遺構であるといえる。

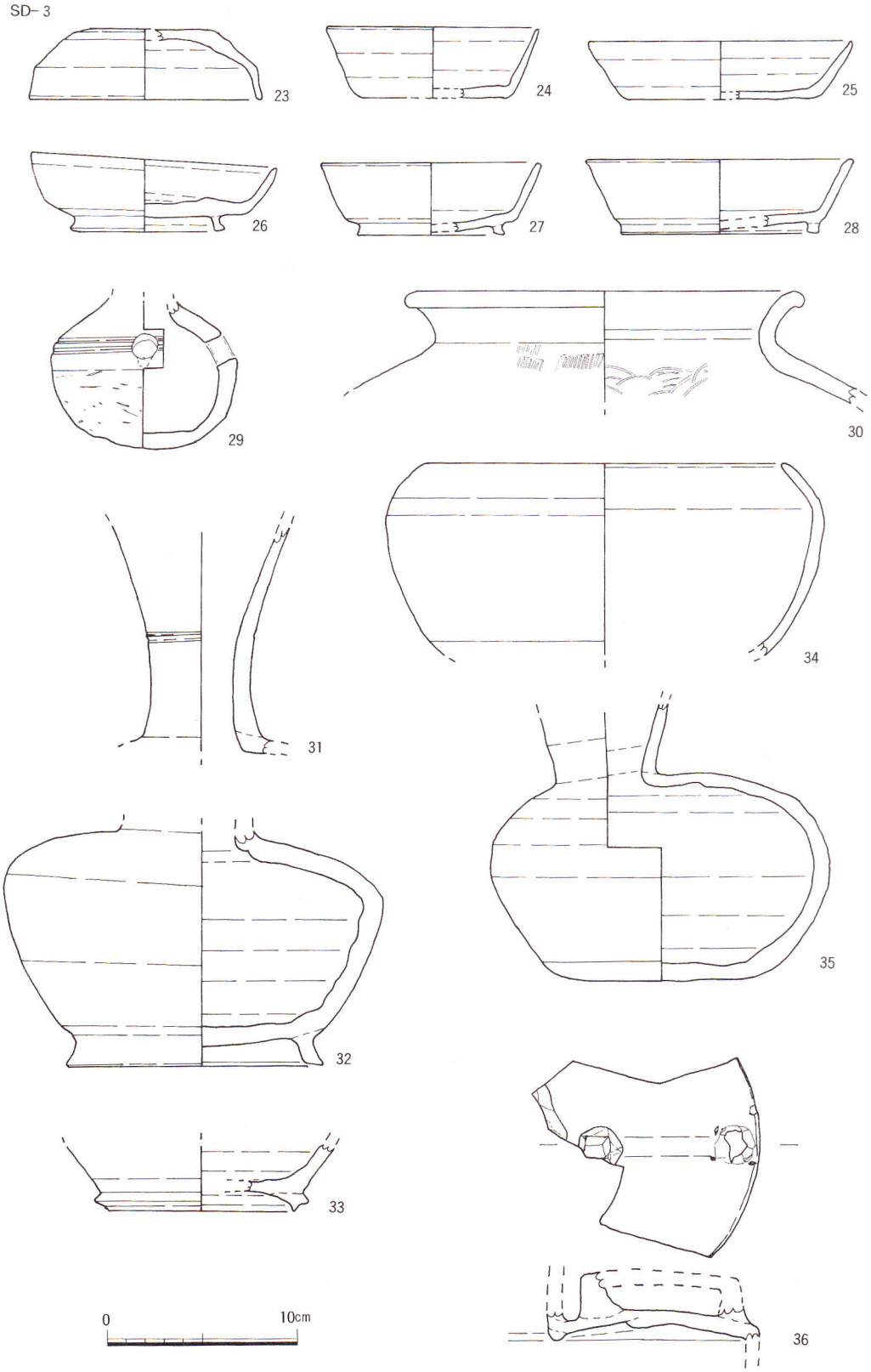
古墳時代～奈良時代の土器

SD-3から古墳時代後期から奈良時代の須恵器、土師器などの土器類がまとまって出土した。この遺構からは今回の調査で量的に最も多くの遺物が出土した。以下、SD-3出土土器を説明する。

SD-3出土土器（第15・16図、図版19・20）

須恵器（23～36）は杯や甑、甕、壺、平瓶などが出土した。杯蓋（23）は口径約12.0cm、器高3.8cmを測るもので、天井部の1/2あたりまでロクロを使ってのヘラケズリが施されている。時期的にはTK209型式（飛鳥Ⅰ期）に併行するものと思われる。

24～28は杯身である。24は乳白色を呈する軟質の杯身で口径11cm、底径3.9cm、器高3.6cmを測る。



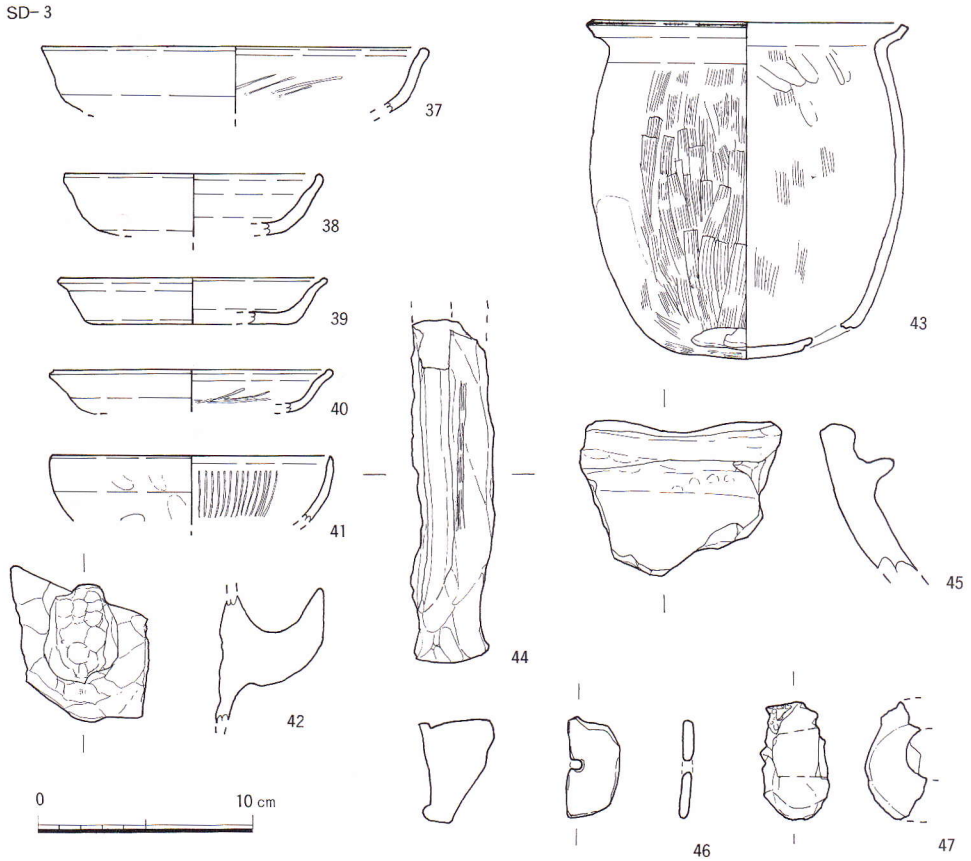
第15図　遺物実測図 5

25は、ロクロからの切り離し痕を不定方向のナデによってナデ消している。27はシャープな作りの高台を持っており、外面は自然釉により暗灰色を呈している。24、25、27共に平城宮Ⅲ期に比定できる。26は完形の高台付きの杯身である。整形段階ではロクロの回転方向は左回りであるのに対して、ヘラケズリによる調整は右回りとなっており、行程によってロクロの回転方向に違いが見られるのが特徴的である。飛鳥Ⅳ期の範疇の遺物と思われる。28の高台は短く、垂直に取り付けられており、新しいタイプのものである。平城宮Ⅵ期のものと思われる。

瓻（29）は、肩部から底部までを良好にとどめている。肩部に沈線が2条巡っており、直径1.4cmの円孔はこの沈線上に開けられている。沈線より下は不定方向のケズリが施され、肩部から頸部の付け根にかけては回転ナデによる整形が行われている。長石、石英、片岩を多く含んでおり、全体的にやや作りが粗いようである。飛鳥Ⅱ期に比定できるものである。

30は口径19.6cmを測る甕の口縁部である。タタキを施した後、内外面をナデ消している様子が分かる。

須恵器の壺は3点出土している（31～33）。31は壺の頸部と思われ、体部との付け根から上に約5cmの所に1条の条線が1周半巡っている。32は壺の胴部である。底径12.6cm、最大胴部径19.0cmを測る。肩部に土器片や灰の塊が融着しており、全体的に焼き歪みが見られる。33は高台を持つ壺の底部で底径は9.4cmを測る。それぞれ31は飛鳥Ⅴ期、32は平城宮Ⅱ期、33は平城宮Ⅲ期に併行するも



第16図　遺物実測図6

のと思われる。

灰白色を呈する鉢（34）は、平城宮Ⅳ期の土器にその類型を見ることができる。

35・36は平瓶である。35は最大胴部径17.6cm、最小頸部径5.4cm、残存器高14.5cmを測る。底部はヘラ切り後ナデを施し、乾燥後、体部との屈曲部分に再度ヘラケズリを施している。時期的にはTK217型式（飛鳥Ⅱ期）に併行するものと思われる。平瓶の天井部（36）は平城Ⅵ期に併行するもので、取っ手は手づくね整形の後にヘラによる面取りが施されている。

37～45は土師器である。37から40は皿で、形式から平城宮Ⅱ期のものであると思われる。37と40には、内面の一部に右方向のヘラ磨きが見られる。飛鳥Ⅲ期の杯身（41）も、内面に縦方向の丁寧なヘラ磨きが施されている。

鍋の把手（42）は手づくね整形によって製作されているが、一部にハケによる調整が見られる。

43は底部穿孔が施されている甕である。口径14.4cm、器高15.6cm、穿孔直径1.5cmを測るもので、外面は5～6条の原体による丁寧なタテハケ、内面はハケによるナデ上げの後上部に指ナデという調整を施している。外面体部下半部に黒班がある。また、底部穿孔は内部から行っている。

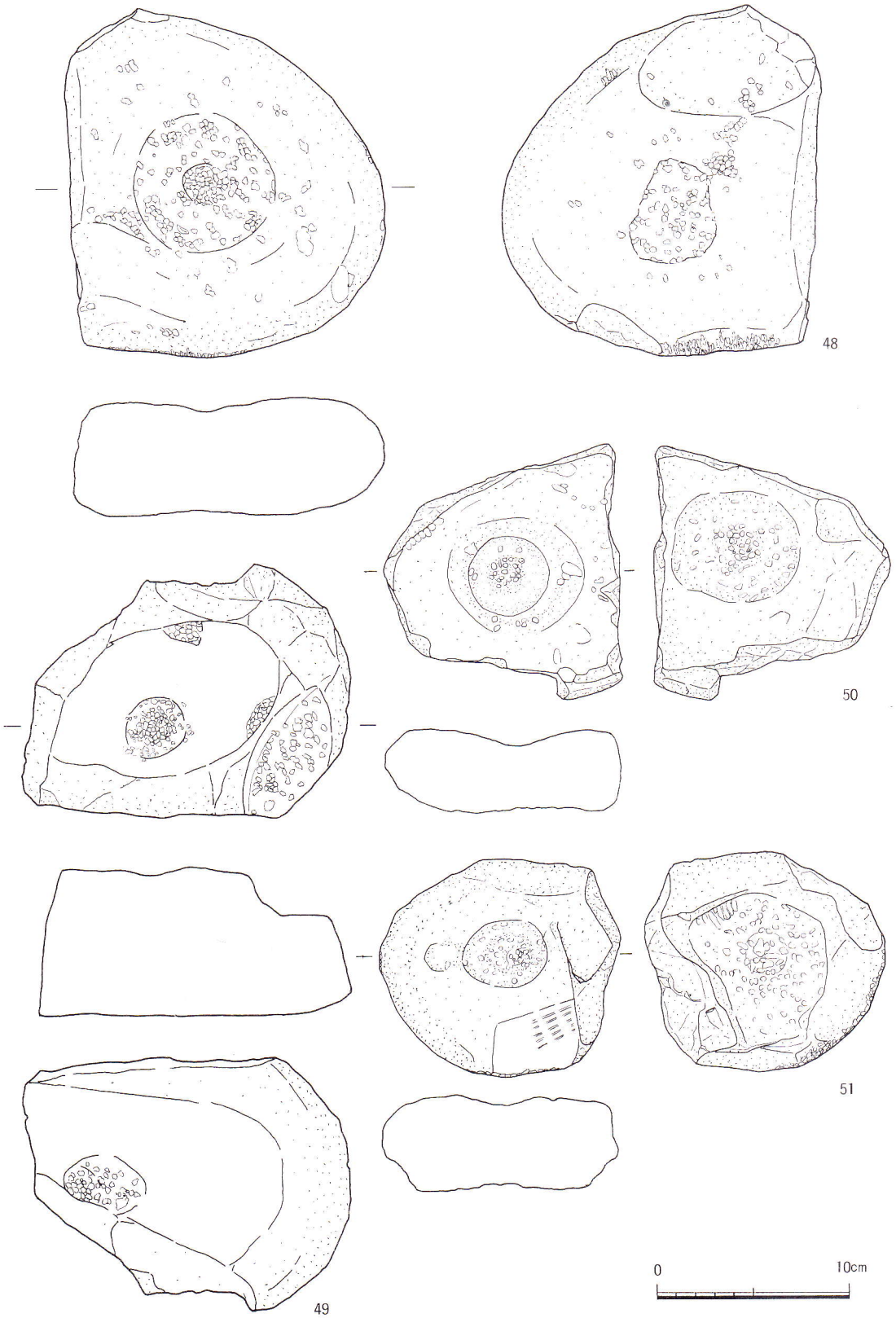
以上の遺物からSD-3は8世紀半ばを中心に機能した溝であり、遅くとも8世紀末までには埋没したものと考えられる。

石器（第17～19図、図版21・22）

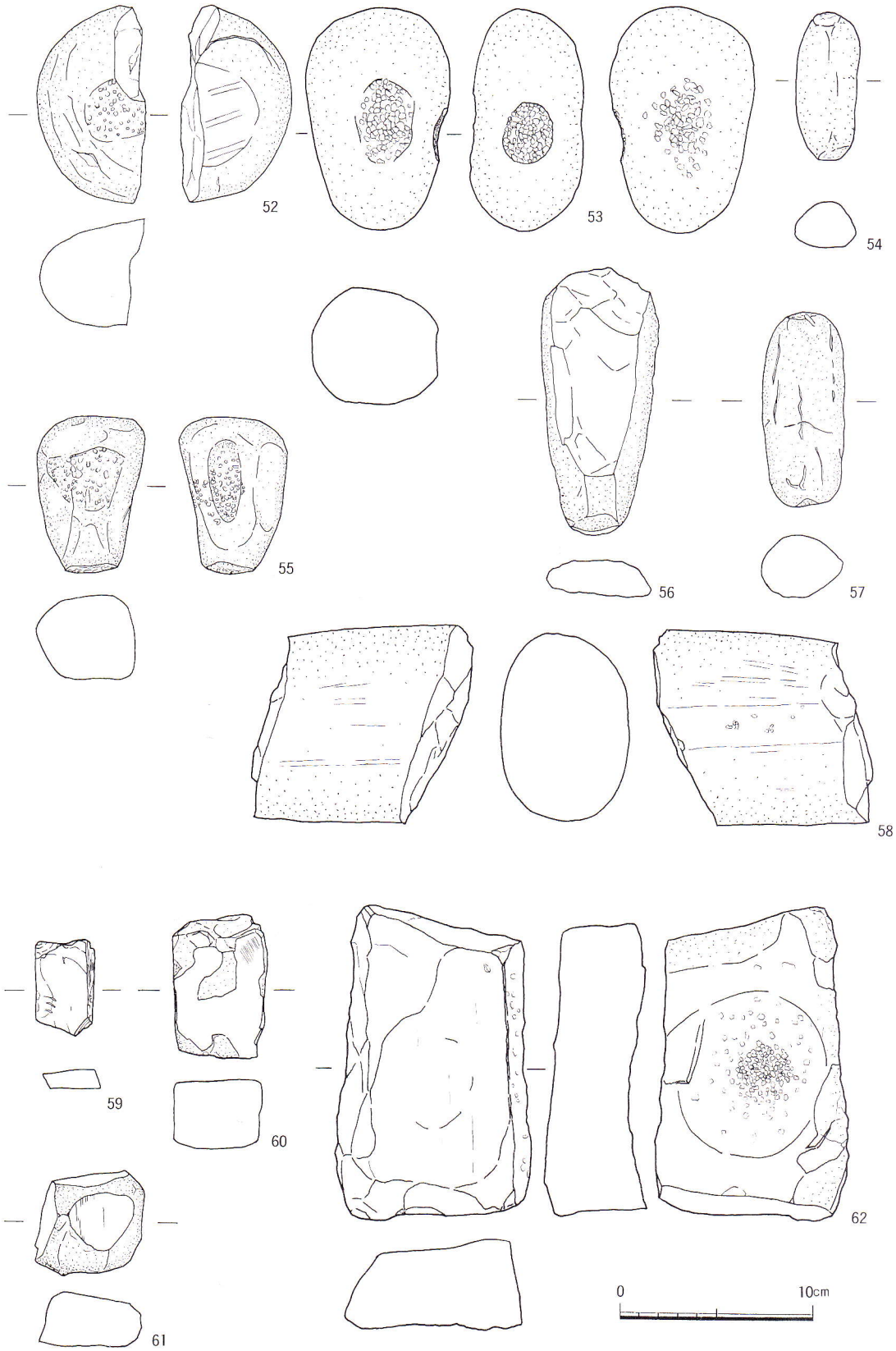
砂岩の自然石を用いた凹石がSD-3から3点（48、49、50）、SD-5から2点（51、52）出土している。48の主要作業面（表面）はその使用痕から、中心の1点を用いて「叩く」・「すりつぶす」という2種類の動作が行われたと思われる。それに対する裏面は表面ほど凹みがなく、面全体を使って「叩く」動作が行われており、また側面の一部分に打撃痕や平滑面も確認できる。49～52も48と同様に複数の作業に用いられた痕跡がうかがえる。49の裏面は敲打痕を除いて平滑になっており、砥石としても使われたことがうかがえる。52は表面に敲打痕、裏面に砥石として使用したと思われる平滑面があることが観察できる。なお、SD-3から出土した凹石には鉄分が多く付着している。

53～57は叩き石である。53は3面に明瞭な打撃痕を残すもので、深くえぐれている側面を多用していたと考えられる。また、下端にもわずかではあるが打撃痕が見られることから、合計4面を使用していたといえよう。56は両面の大きな剝離により全体的に板状を呈しており、先端部に使用痕がみられる。54は灰色、57は暗青灰色を呈する叩き石で、上下両端に打撃痕が存在する。さらに57には一部分にミガキ痕もみられる。また先端部以外に表裏両面に叩き痕がみられるもの（55）もある。53、54、56はSD-3、55、57は第3層からの出土であり、石材は全て砂岩である。

58～62は砥石である。砂岩を用いた砥石である58は、全体的に平滑であるが使用痕が不明瞭であり、あまり使い込まれていなかったようである。なお裏面の中央部は帯状に褐色を帯びており、なおかつ若干の敲打痕が見られる。出土地点はSD-3である。59はSD-8から出土したもので、粘板岩系の石材を使用しており全体的に黒灰色を呈している。表面と左右側面の3面を使用しているが、右側面は凹凸がやや残っており砥石として使用した期間は短かったと思われる。SX-1出土の60は砂岩系の石材を用いたものであるが、二次焼成を受けているため乳白色に変化しており、全体的に剝離が進んでいる。そのため明確に確認できる使用面は表面の一面のみである。61は表面と左側面



第17図　遺物実測図７



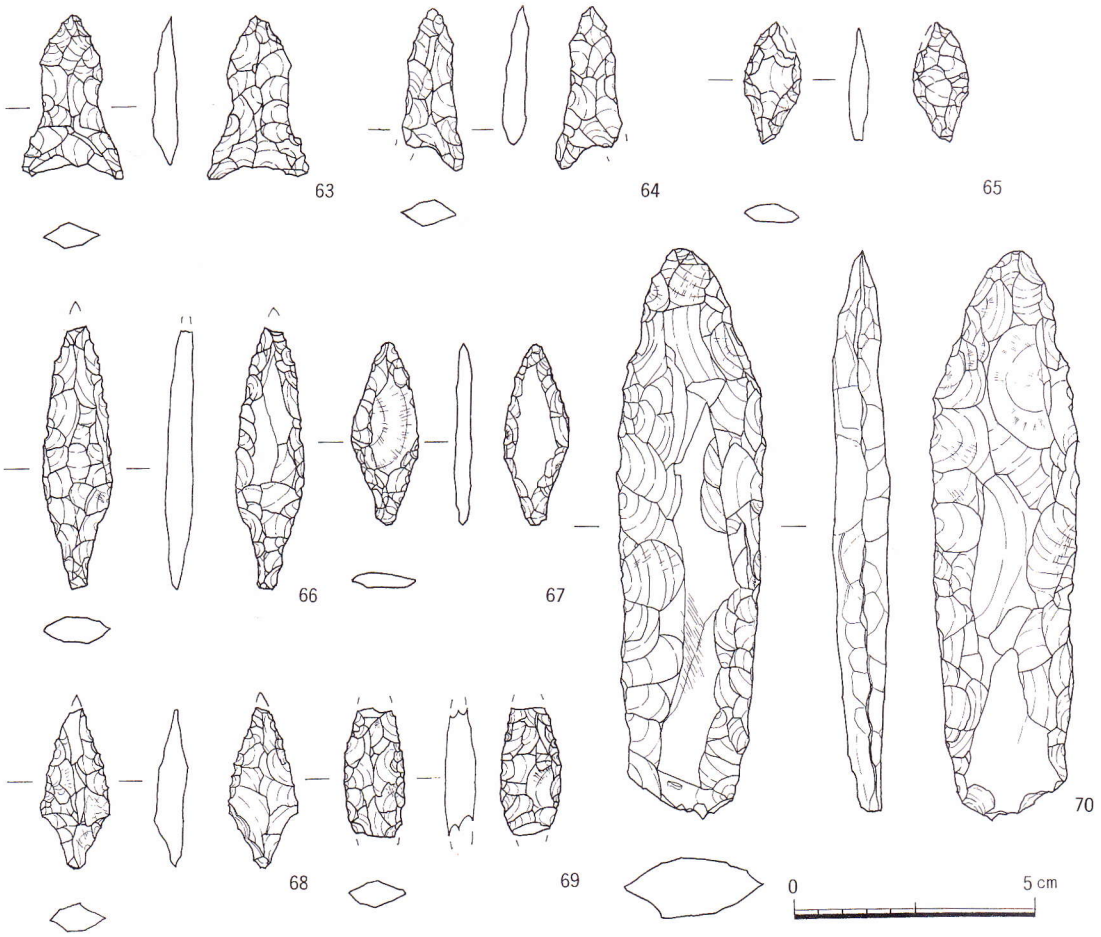
第18図　遺物実測図 8

に砥石として使用した痕跡がみられるが、それ以外に叩き石として用いた痕跡が下側面にみられる。第5層出土で石材は砂岩で明灰白色を呈する。62はSD-3出土の遺物で、平滑面と敲打痕を片面ずつに持つ砂岩である。砥石と台石を兼用しているわけだが、平滑面の方が特に使い込まれており、主に砥石として用いられたと思われる。敲打痕を残す面は鉄分がかなり付着している。

これら自然石を利用した石器は、作業に応じて使い分けられるのではなく、複数の作業に用いられていたと言えるだろう。

打製石器では石鏃が７点、石槍状石器が１点出土している。

63～69は石鏃である。石材は全てサヌカイトで黒灰色を呈するものがほとんどである。63、64は凹基式の石鏃で、ともにSD-3からの出土である。63は長さ3.5cm、幅2.0cm、厚さ0.55cmを測り、表面は右回りの順による細部調整、裏面は不定方向への調整が施されている。64は長さ3.4cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmを測る。両面とも先端部から基部に向けて調整が行われているが、表面はやや調整が不統一である。65は最大幅部位が先端寄りに位置しており、凸基II式に分類される。細部調整の方向は不定であり、一部に鉄分が付着している。SD-3から出土しており、長さ2.5cm、幅1.2cm、厚さ0.35cmを測る。66～68は凸基有茎式のものである。66は第3層から出土したもので、残存長5.4cm、幅1.4cm、厚さ0.55cmを測る。両面とも左側縁において一定方向の細部調整が施されている。



第19図　遺物実測図９

67は薄い板状の剝片から作られており、両面に浅形細部調整を施して仕上げている。68は先端部をやや欠いているが、左回りの方向性で調整が施されている。67、68は共にSD-3出土である。69はSD-8からの出土で先端部・基部ともに欠損しているが、形状から凸基II式と思われる。表面は右回り、裏面は先端部から基部への方向で細部調整が行われている。

70は石槍状石器である。弥生時代中期の堆積層である第5層から出土している。長さ11.85cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmを測る。石材はサヌカイトを用いているが、風化が激しく淡灰色を呈している。調整は両面とも先端部から基部にむけて行っており、左側はウロコ状、右側は階段状の調整が施されている。また基部から1/2の部分までに歯潰し痕がみられ、短剣として用いたものと考えられる。

以上の石器について、SD-3から出土した石器についてはSD-21から混入した可能性が考えられる。またその他にも弥生時代の遺構及び包含層から出土している石器が見られることなどから、これらの石器は弥生時代のものであると考えることができよう。

その他の遺物

その他の遺物としてSD-3から竈、紡錘車、フイゴ、獣骨（馬の歯）、種子などが出土した（第16図、図版20）。

竈（44・45）は2点図化することができた。44は底部に接地面、裏面に竈本体との剝離面がみられる。これらの方向性から、この竈片は向かって左側の庇の底部と考えられる。45は口縁の部分である。紡錘車（46）は直径約4.6cm、厚さ0.5cm、穿孔直径0.55cmを測り、周縁を研磨している。また全体的にやや湾曲しており、弥生土器の転用品と考えられる。SD-3に混入したものとみられる。

フイゴの羽口（47）は外面に鉄が多く付着しており、内面は褐色を呈する。熱により先端部分が溶け、赤変した部分がある。

また、遺物包含層などから平安時代の黒色土器、土師器、鎌倉時代の瓦器、土師器、江戸時代の陶磁器類などが出土した。その他、近代の遺構と考えられる埋甕遺構（図版15）からは近代の陶磁器類、鉄製品、ガラス製品などが出土した。

参考文献
寺沢薫・森岡秀人　『弥生土器の様式と編年』　近畿編Ⅰ　木耳社　1989年
田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981年
古代の土器研究会　『古代の土器Ⅰ　都城の土器集成』　1992年
平井勝　『弥生時代の石器』　考古学ライブラリー64　ニューサイエンス社　1991年
禰宜田佳男　「打製短剣・石槍・石戈」『弥生文化の研究』第9巻　雄山閣出版株式会社　1986年

7．まとめ

（1）弥生時代の大溝について

本調査で検出したSD-21は調査区の南東端部から調査区西端中央部にかけて検出した東西方向に掘削された溝である（第9図参照）。上面を重なって掘削されたSD-3に削られているが、幅2.6m、深さ40cmの規模を測り、東西延長約13.0mを検出したものである。この溝は本来、遺構の南半部分に掘削したものであったが、埋没後北側に再掘削されたものである。北側の再掘削部分をSD-21a、南側をSD-21bとした。SD-21bは北側肩部分を再掘削により壊されているため正確な規模は不明であるが、幅1.3m以上、深さ30cmを測るものである（第11図参照）。SD-21aは幅1.6m、深さ40cmの規模を測る。この大溝は出土遺物から弥生時代中期後半頃のものであると考えられ、SD-21a、SD-21bの双方共に底面の標高から、西から東へと流路方向を持ったものとみられる。

ところで、太田・黒田遺跡において本調査地周辺で検出された幅2.0m以上の規模をもつ弥生時代の大溝の掘削された方向性を検討するならば、近年検出の例に平成7年に本財団の行った第26次調査検出のSD-19、SD-16bの2例がある。

第26次調査は本調査地の南側約150mの場所で行ったものであり（第3図参照）、調査で検出した弥生時代前期後半から中期初頭の大溝SD-19の流路方向が北西から南東方向である。また、同調査で検出された弥生時代中期後半の大溝SD-16bの流路方向は南西から北東方向であった。

本調査で検出したSD-21は西から東へと流路方向をもつものであり、第26次調査検出例などを加えて考えるならば、太田・黒田遺跡範囲の西方向に水の引先となる自然河道が存在したものとみられる。この河道は日下雅義により復原案を提示されている当時の旧紀ノ川の流路に相当するものであると考えられる。

（2）奈良時代の大溝について

奈良時代の大溝SD-3は調査区の東端部から西端部にかけて延長約13mを検出した幅約5.0m、深さ約50cmを測る規模の大きなものである（第9図参照）。底面の標高から、東から西へと流路方向を持ったものと考えられる。土層堆積状況について、遺構埋土は粗砂が主体であり、多量の遺物が各層から出土した（第12図参照）。堆積状況から、再掘削が幾度も行われ、その度に幅及び深さが変化したものであると考えられ、最終的には洪水により奈良時代後期に埋没したものと考えられる。

ところで、太田・黒田遺跡の現在までの調査で、主要な奈良時代の遺構として第21次調査検出のSE-01と第3次調査検出のSE-202の2例があげられる（第3図参照）。第21次調査は和歌山市教育委員会が昭和62年に実施したものである。調査により検出されたSE-01は直径約3.5m、深さ約3.0mの規模の円形掘方をもち、掘方内に丸太を半裁して刳った長さ約2.0m、幅約1.0mの木枠を2枚組み合わせた長径1.2m、短径0.8mの平面形が楕円形の井戸枠を設けるものである。なお、その井戸枠の上に角材と板材を組み合わせた長辺1.2m、短辺1.0mの平面形が長方形の井戸枠をもつ。井戸の基底部には土師器を破砕したとみられる多量の細片、及び完形の須恵器十数個体を詰めており、それらの土器は井戸枠を据えた時に置かれたものであると考えられた。また、埋土の中位から斉串が1点出土している。第3次調査は昭和44年に和歌山市教育委員会が太田・黒田遺跡調査団に委託

して実施されたものである。調査により検出されたSE-202からは土師器、須恵器などの土器類と共に和銅開珎が42枚、万年通寶が４枚、平櫛などが出土した。これらの出土遺物などから、調査担当者は当地を名草郡の郡衙の可能性があると指摘されている。

以上の２遺構は本調査検出のSD-3の流路の上流方向にあたる南東方向に位置するものである。また、SD-3の堆積土の上層から特に遺物が多量に出土しており、それらの遺物は、須恵器、土師器などの土器類の他、竈、フイゴ羽口、獣骨（馬の歯）などがある。これらの遺物を用いたであろう奈良時代集落（郡衙？）の中心は、先の井戸２例のあるこの溝の上流（南東側）に展開していたものと思われる。そのことなどから、当調査地は太田・黒田遺跡における奈良時代の集落（郡衙？）北西側縁辺部にあたるものと推定することができる。

（３）平安時代の土地利用について

平安時代のSD-2（第６図参照）は和歌山平野における条里制土地区画の復原案（中野榮治案）に当てはめて考えるならば、「名草郡４図８里１坪」と「名草郡４図８里12坪」の坪境溝の位置に当たり、SD-2と類似するSD-2の上層堆積層の第３層は平安時代の耕土に相当するものであると考えられる（第5図参照）。この事実は、従来からの歴史地理学的な手法である現況の地形から推定していた条里復原案に対して、実証的な資料を提示することができたという点で貴重な成果を得ることができたといえる。

また、江戸時代のSD-1（第６図参照）は位置をSD-2から南に４ｍ移動するが、第１区及び第２区まで直線的に掘削されており、方向性からいうならばSD-2と同様の性格のものであると考えられる。

まとめるならば、調査地は条里制土地区画の復原案から「名草郡４図８里１坪」と「名草郡４図８里12坪」の一部に当たり、SD-2（平安時代）及びSD-1（江戸時代）を坪境溝に相当するものと推定するならば、調査地での条里制土地区画の起源は平安時代であり、以後江戸時代頃にも踏襲され、現在の地割りに至っているものと考えられる。

参考文献
森浩一・白石太一郎「南近畿における前・中期弥生式土器の一様相　－和歌山市太田・黒田遺跡の調査から－」『考古学ジャーナル』33　ニュー・サイエンス社　1969年
日下雅義「紀伊湊と吹上浜」『和歌山の研究』１　地質・考古編　清文堂　1979年
中野榮治「名草郡の条里」『紀伊国の条里制』　古今書院　1989年
中野榮治「条里制」『和歌山市史』第１巻　和歌山市史編纂委員会　1991年
井馬好英ほか『太田・黒田遺跡 第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995年

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおた・くろだいせきだい33・34じはっくつちょうさがいほう
書名	太田・黒田遺跡 第33・34次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書
シリーズ番号	第１４集
編著者名	北野隆亮・高橋方紀・奥村薫・前田敬彦
編集機関	財団法人 和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL0734－32－0012
発行年月日	西暦 1996年11月30日

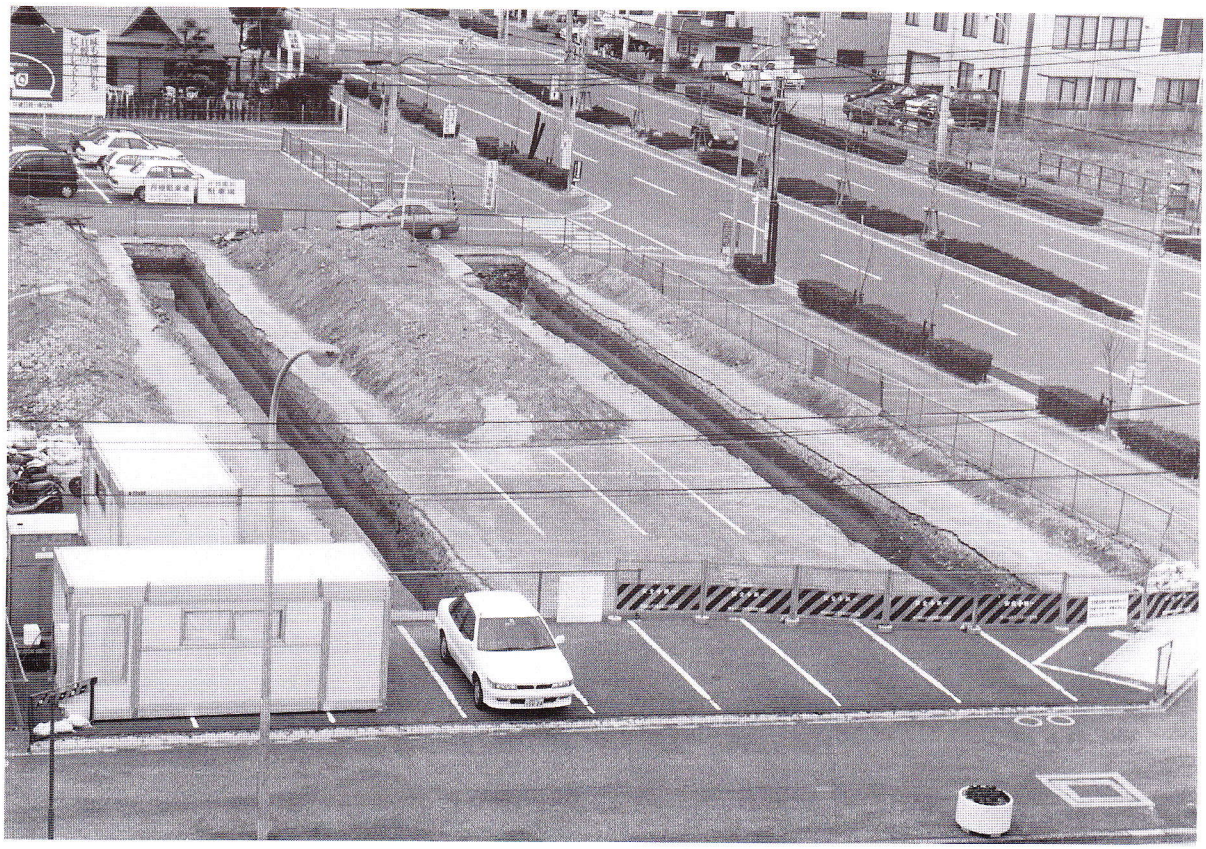
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
太田(おおた)・黒田(くろだ)遺跡(いせき)	和歌山県(わかやまけん) 和歌山市(わかやまし) 黒田(くろだ)	3020150	356	34° 13′ 45″	135° 12′ 44″	19960304 19960729	330	事務所 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田・黒田 遺跡	集落	弥生時代 奈良時代 平安時代	大溝2、溝14 土坑5	弥生土器 須恵器、土師器 凹石、叩き石、石鏃	弥生時代の大溝 奈良時代の大溝 平安時代の条里溝

図　　版

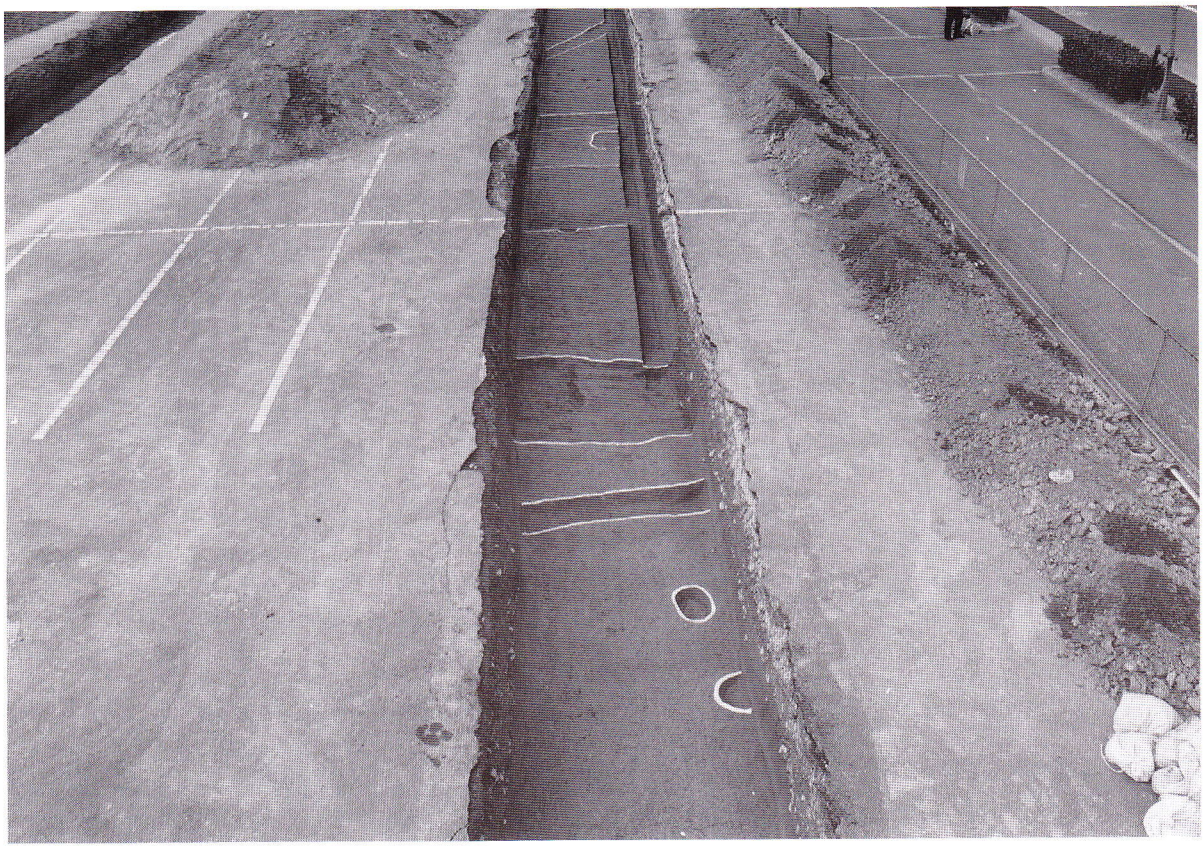
図版1　第33次調査

調査前の状況（南から）

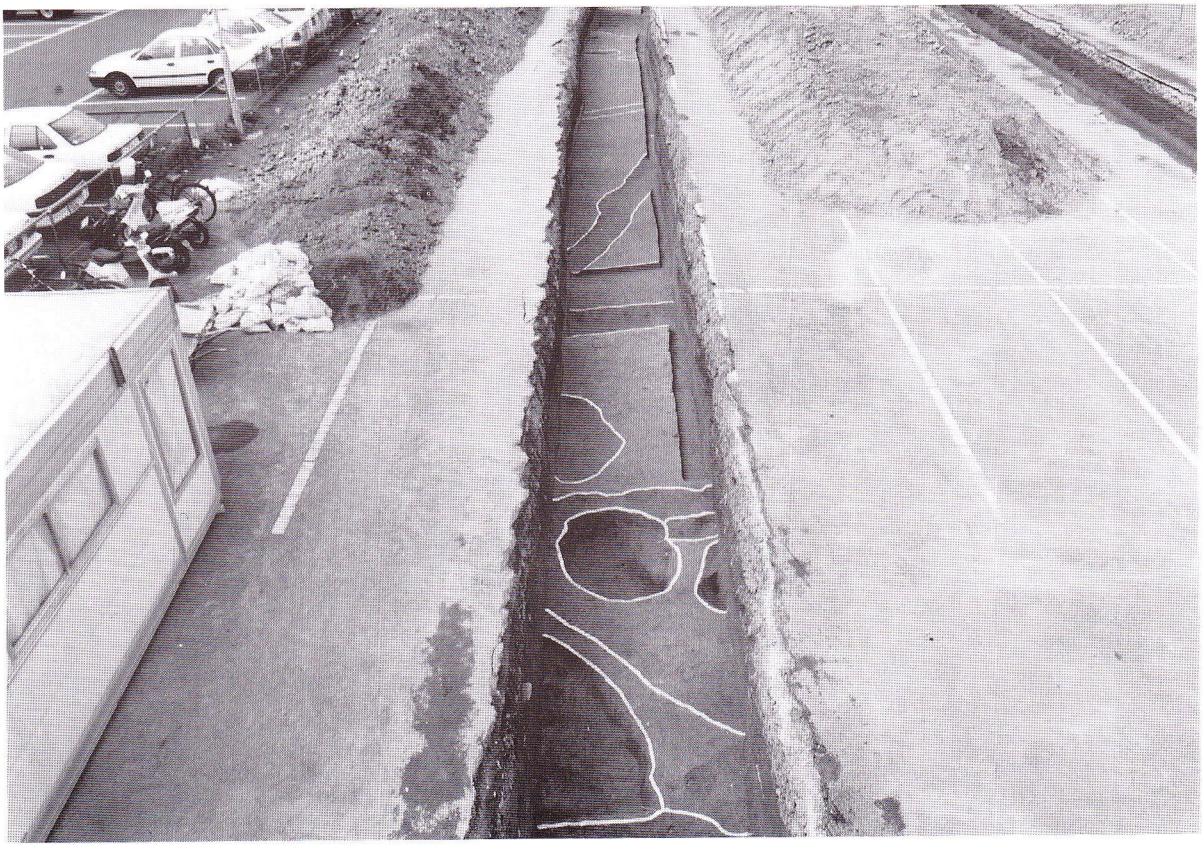


第１・２区 掘削状況（南西から）

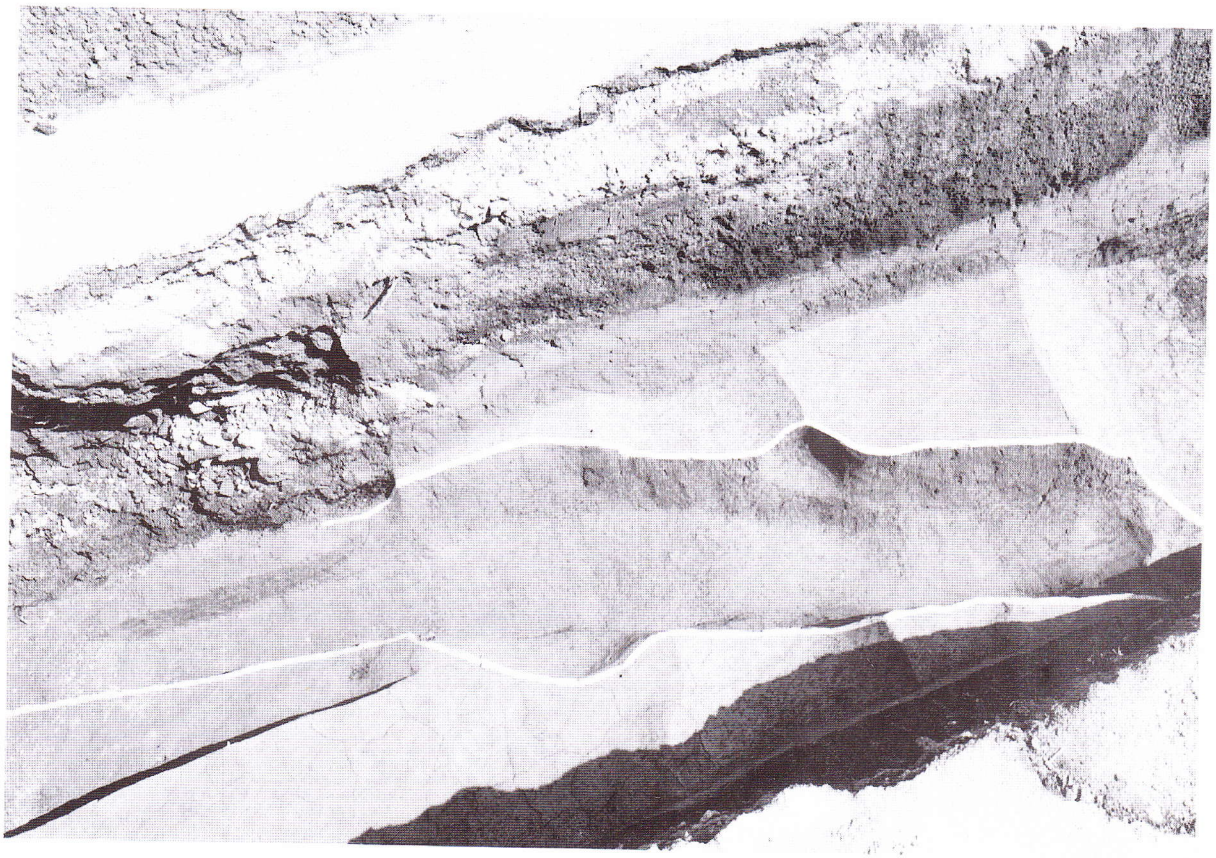
図版2　第33次調査



第1区 全景（南から）

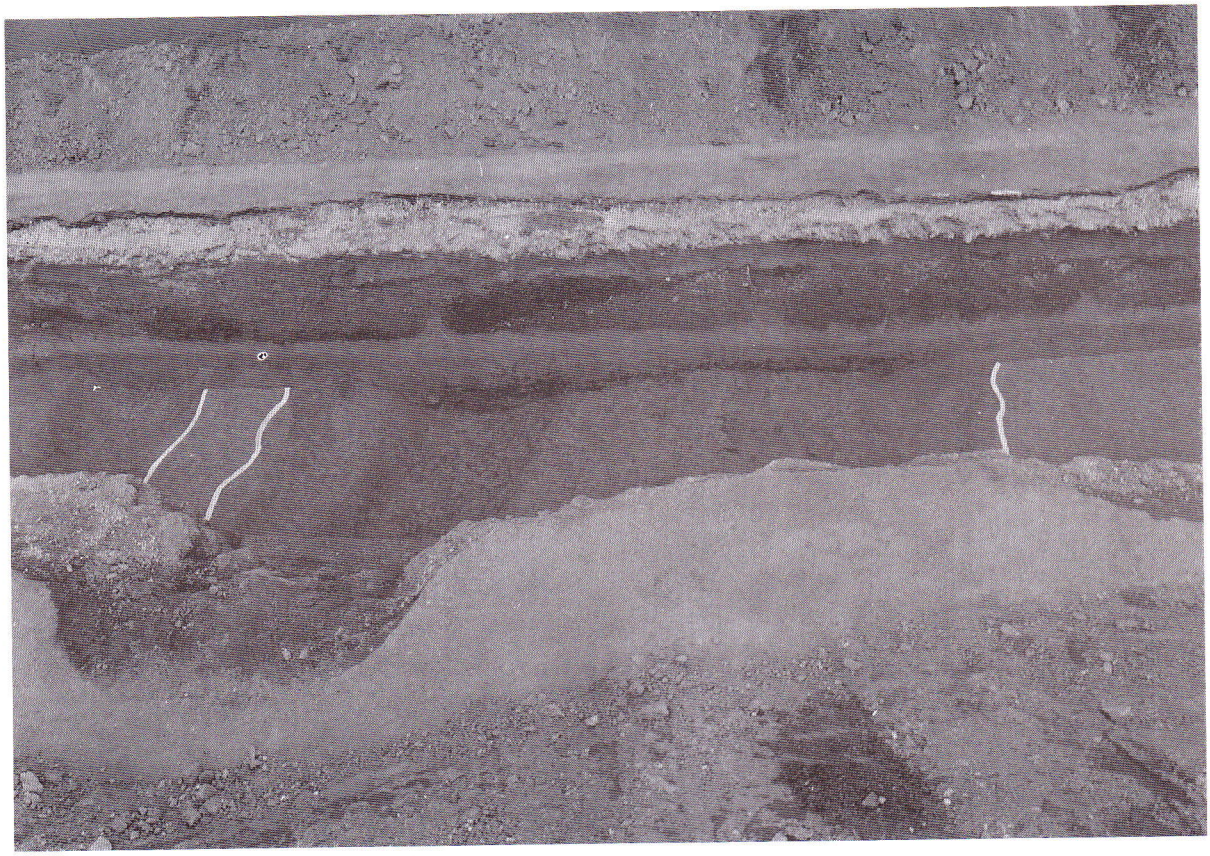


第2区 全景（南から）

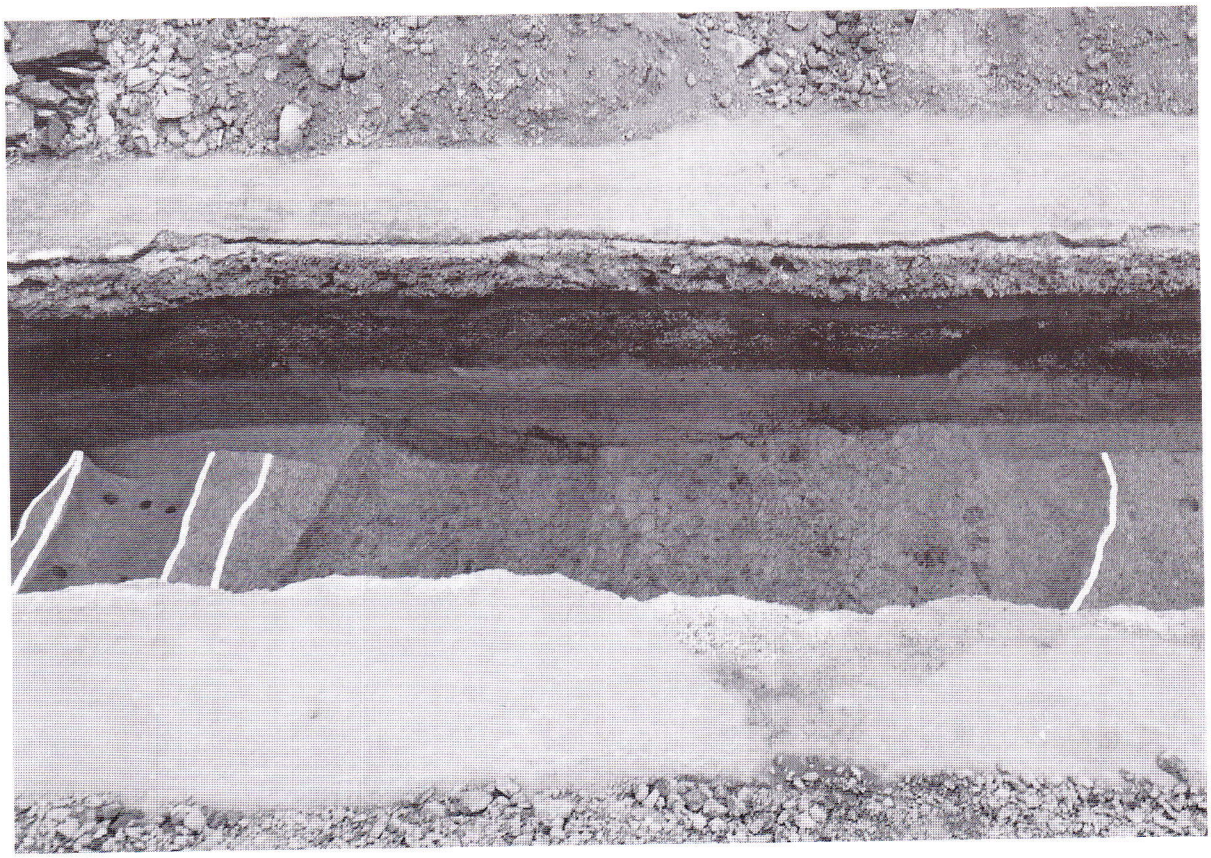


第1区 SD-8（西から）

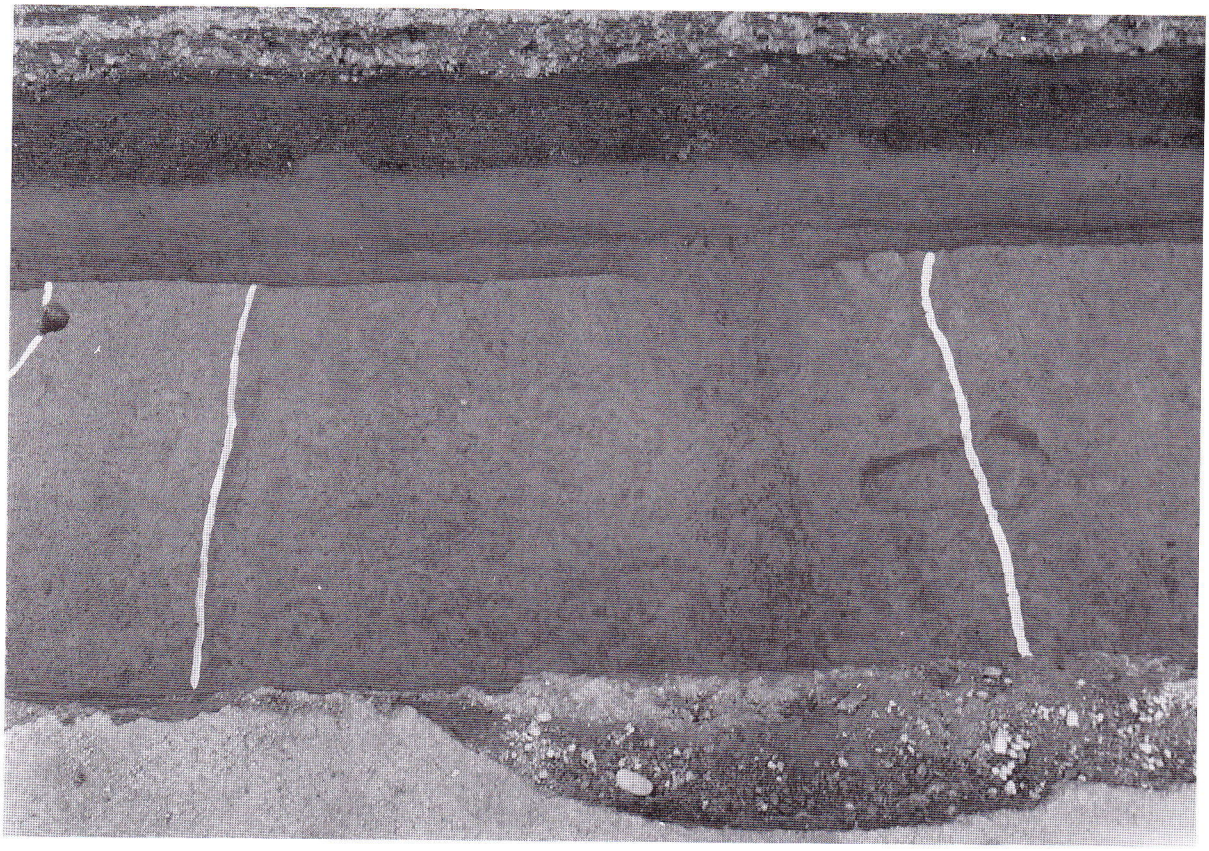
第1区 SD-8土層堆積状況（南から）



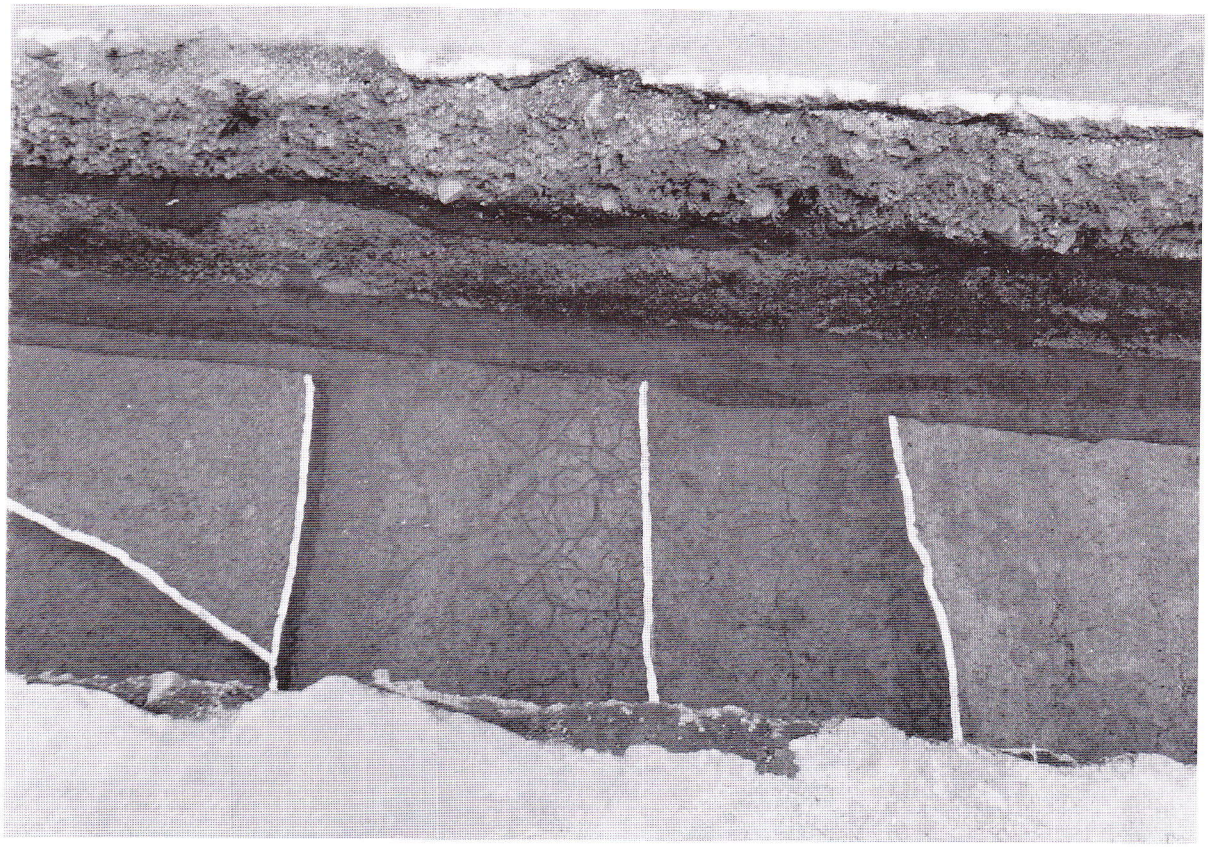
第1区 SD-3（西から）



第2区 SD-3（西から）

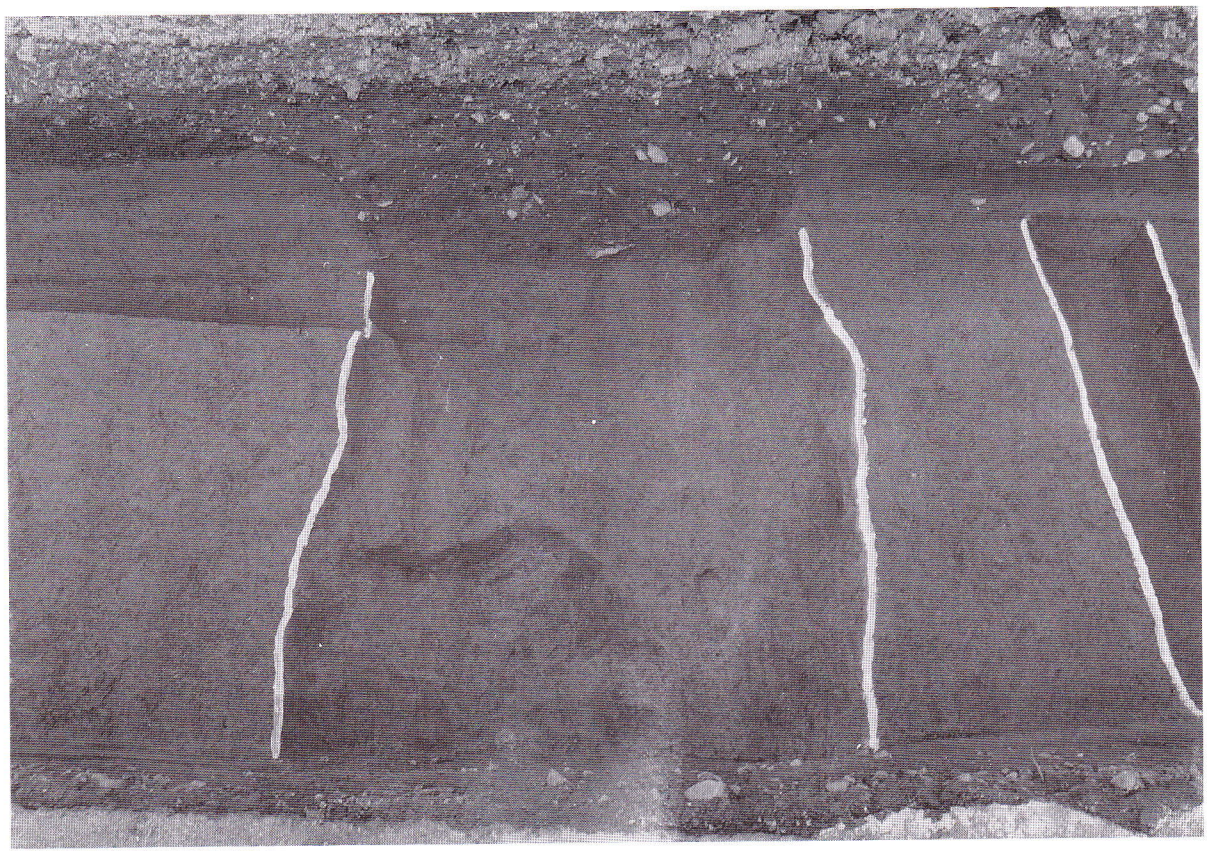


第1区 SD-2（西から）



第2区 SD-2（西から）

図版6　第33次調査



第1区 SD-1（西から）

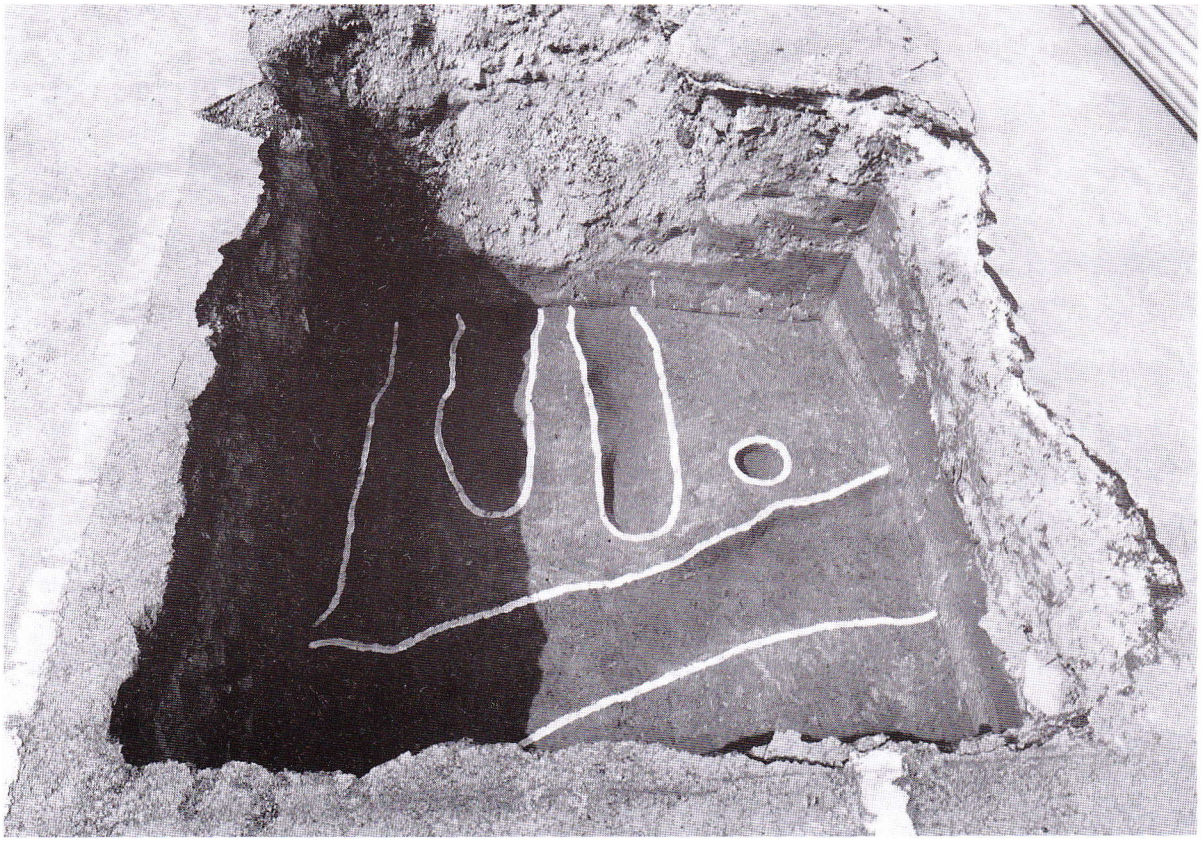
第2区 SX-1他（東から）

図　　版

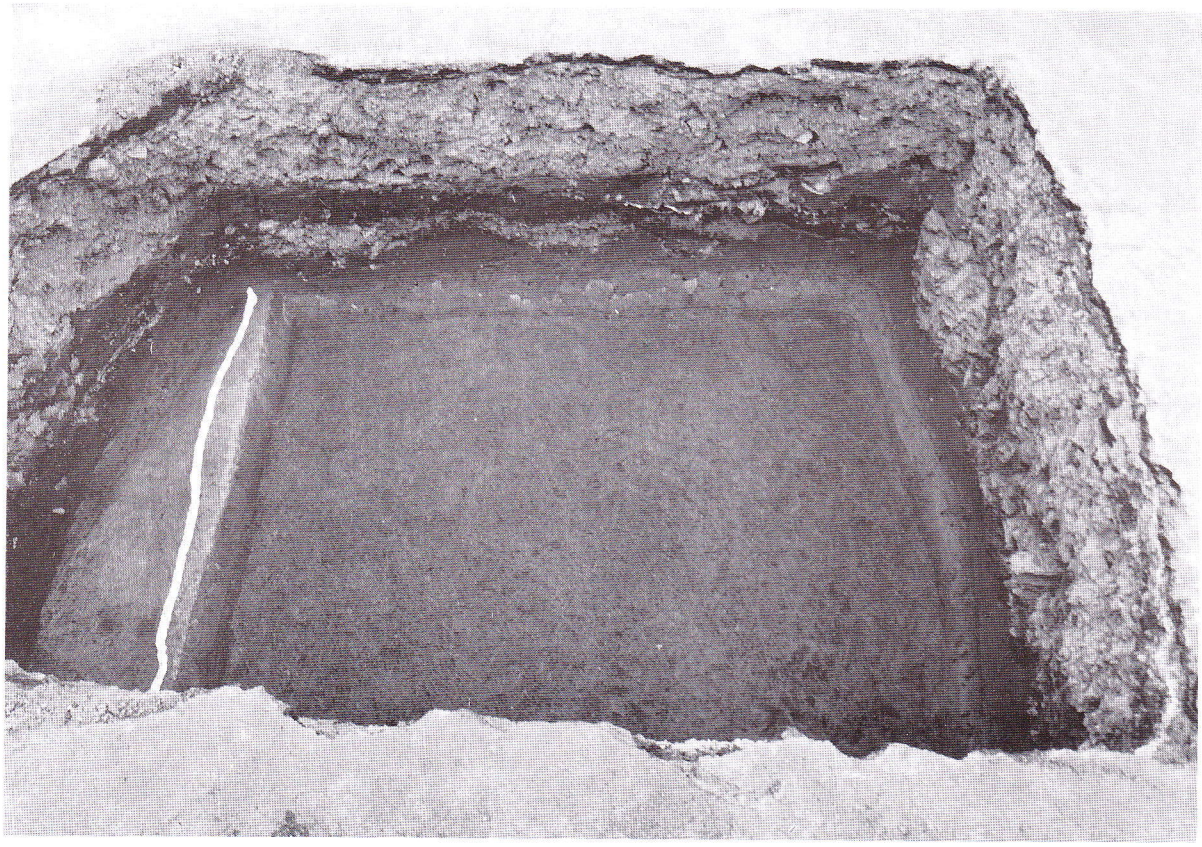
G1～G4区 掘削状況（南から）

G1～G4区（北から）

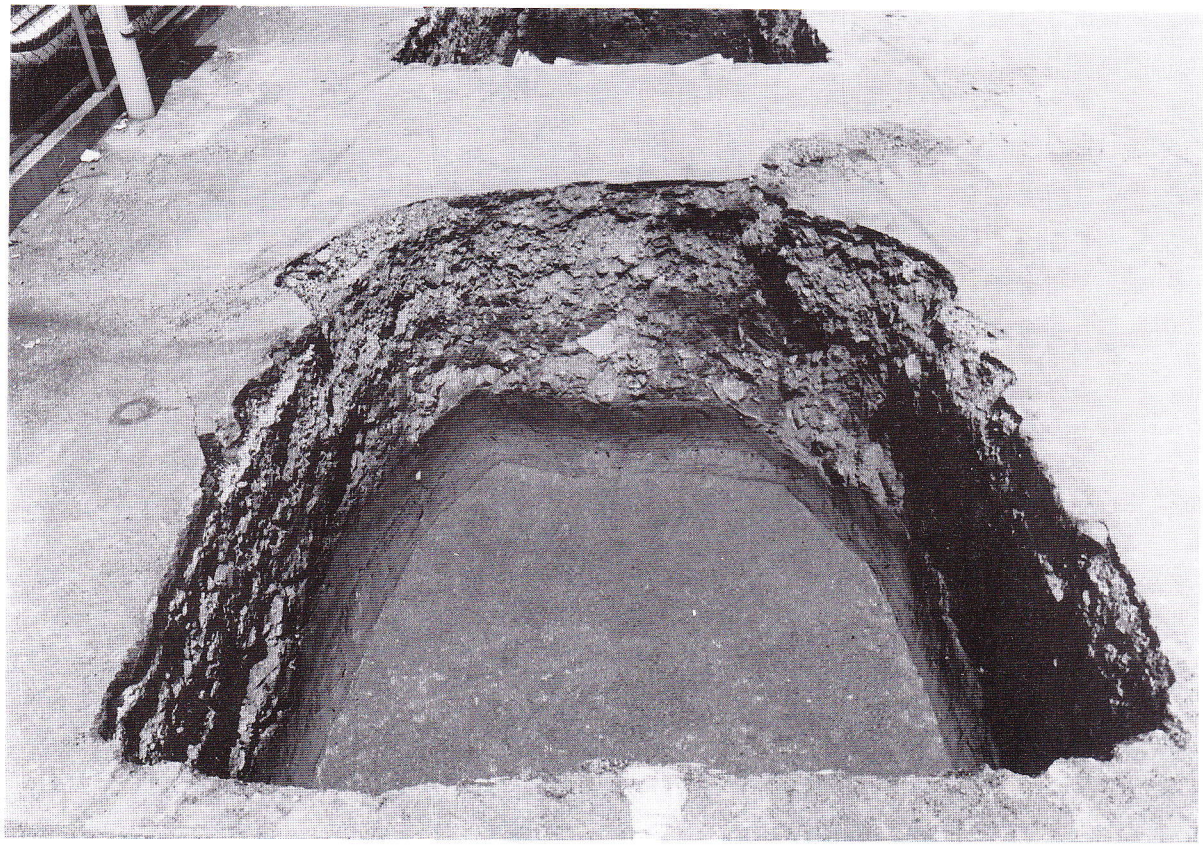
G1区 全景（南から）



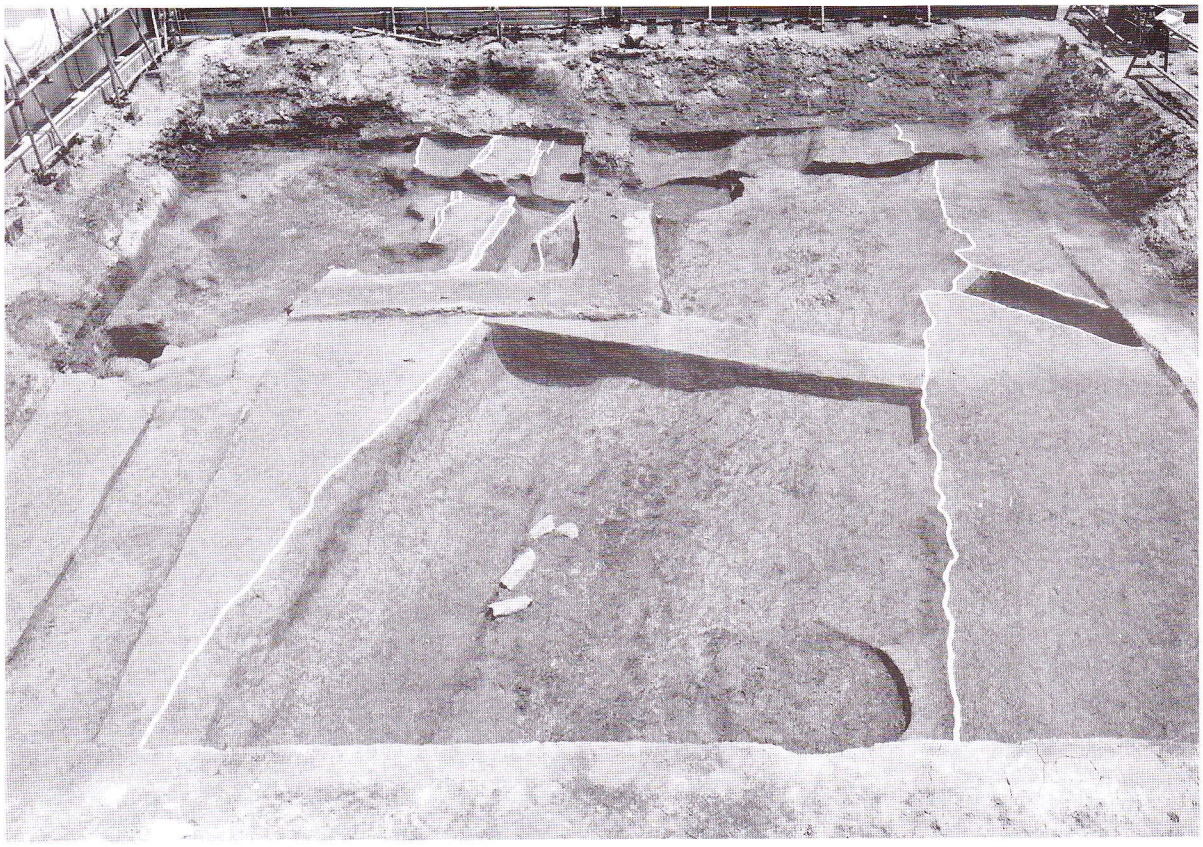
G2区 全景（南から）



G3区 全景（西から）

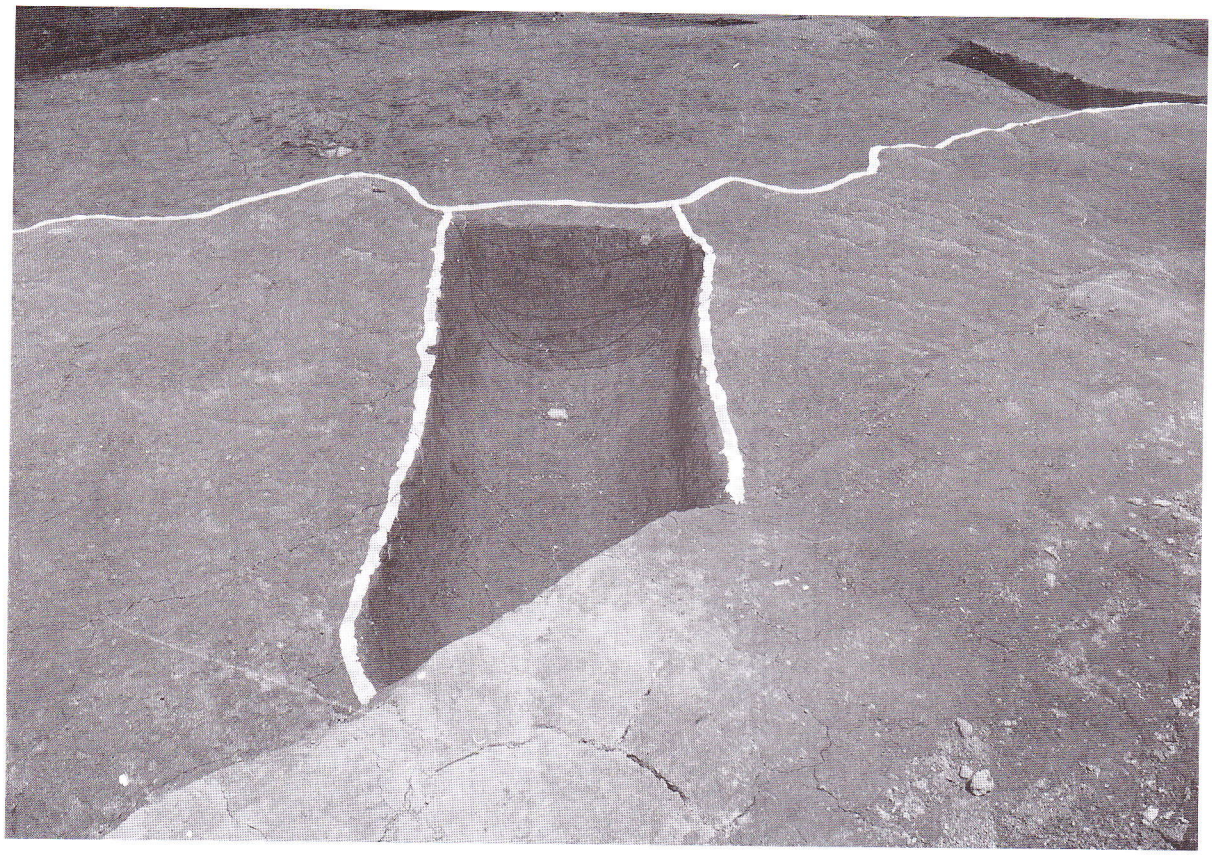


G4区 全景（南から）

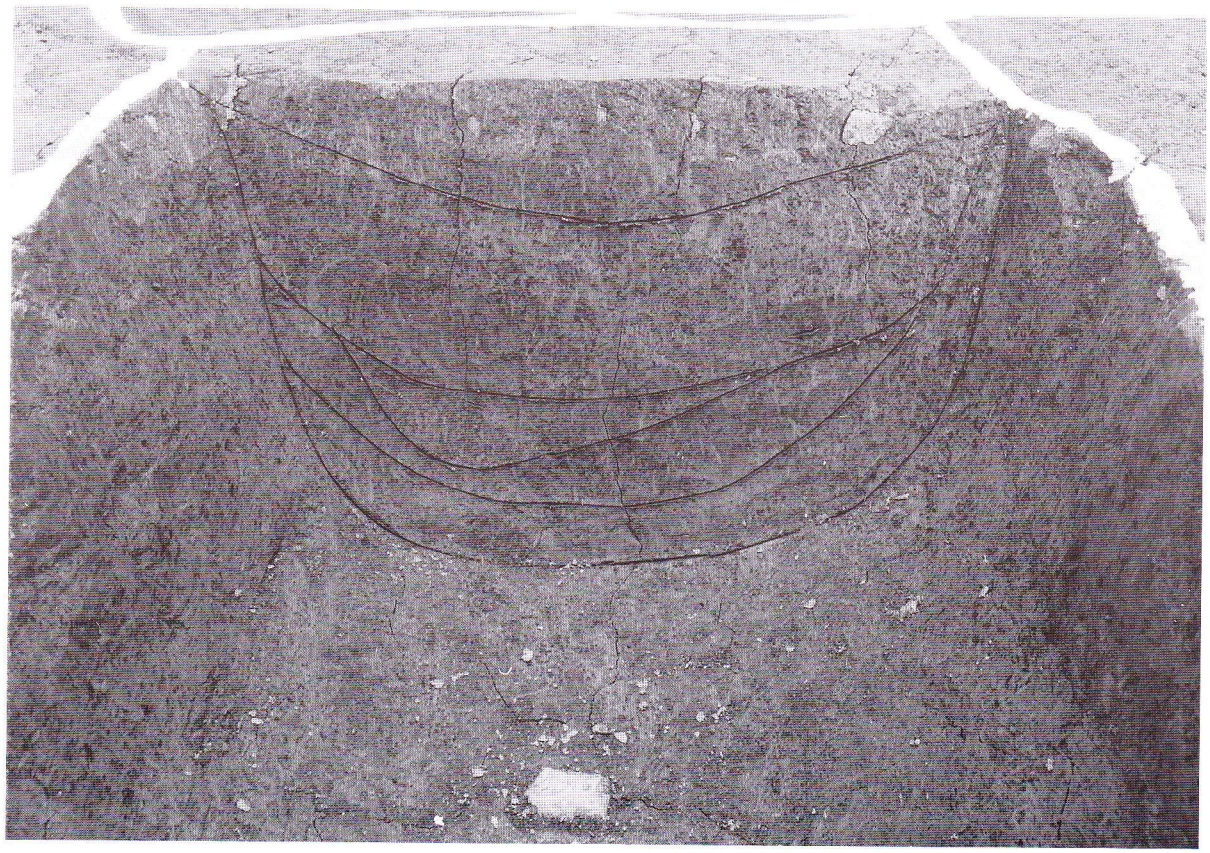


第3区 全景（西から）

第3区 全景（東から）



第3区 SD-8（南西から）



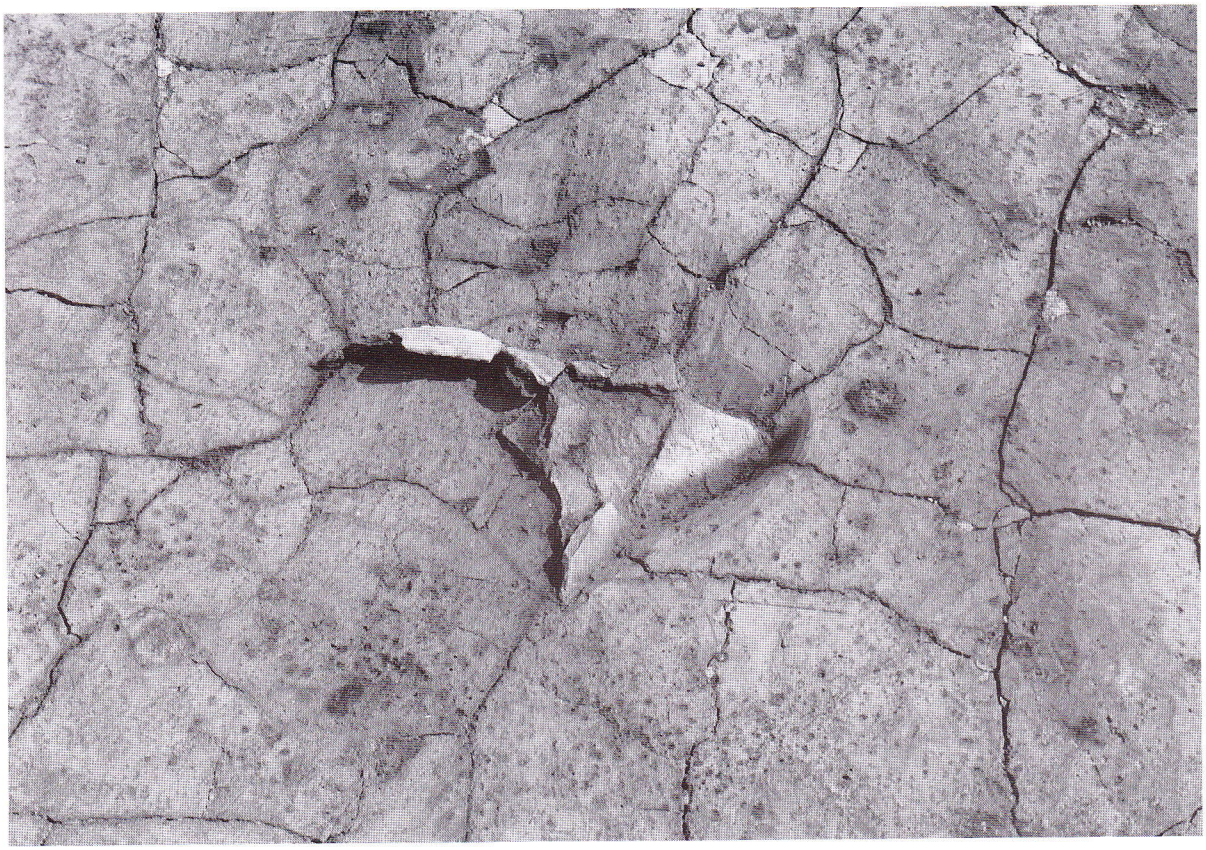
第3区 SD-8土層堆積状況（南西から）

第3区 SD-21（西から）

第3区 SD-21（東から）

第３区 SD-21土層堆積状況（西から）

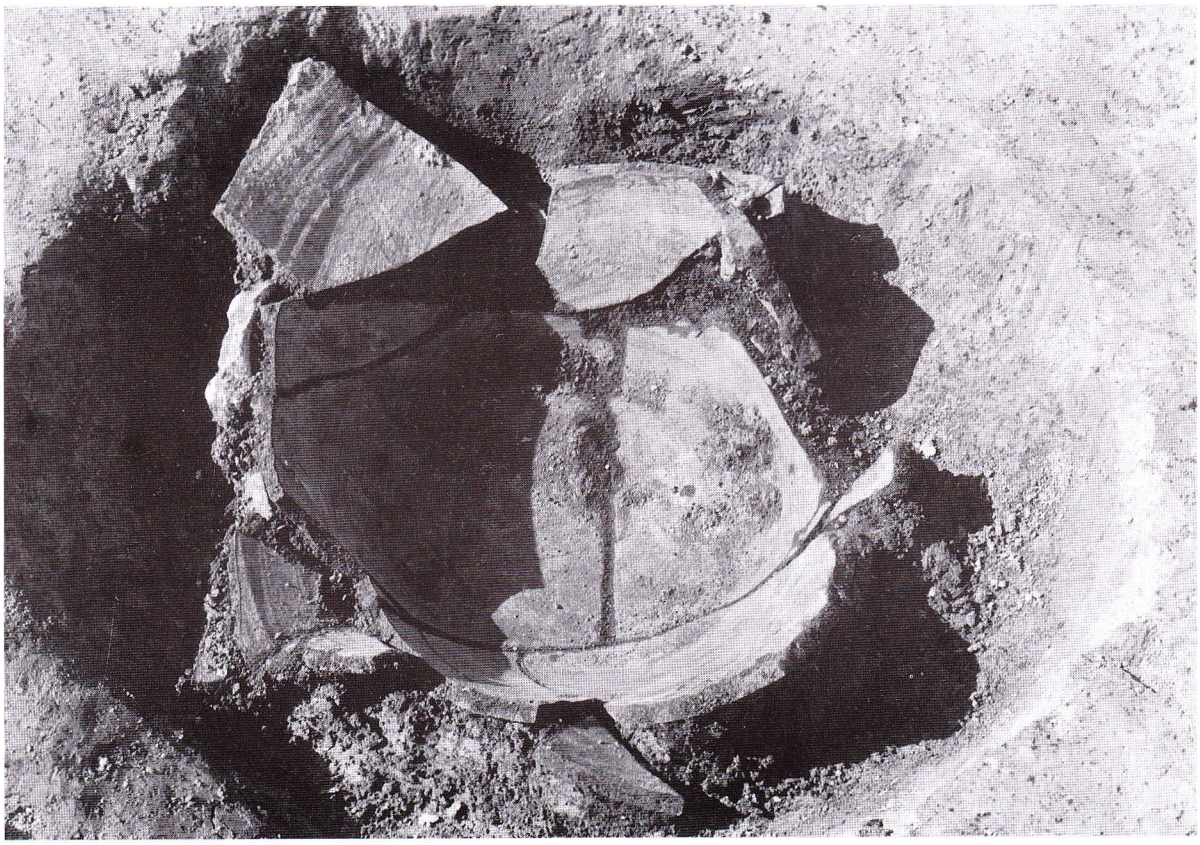
第３区 SD-21遺物出土状況 1（西から）



第３区 SD-21遺物出土状況２（南から）

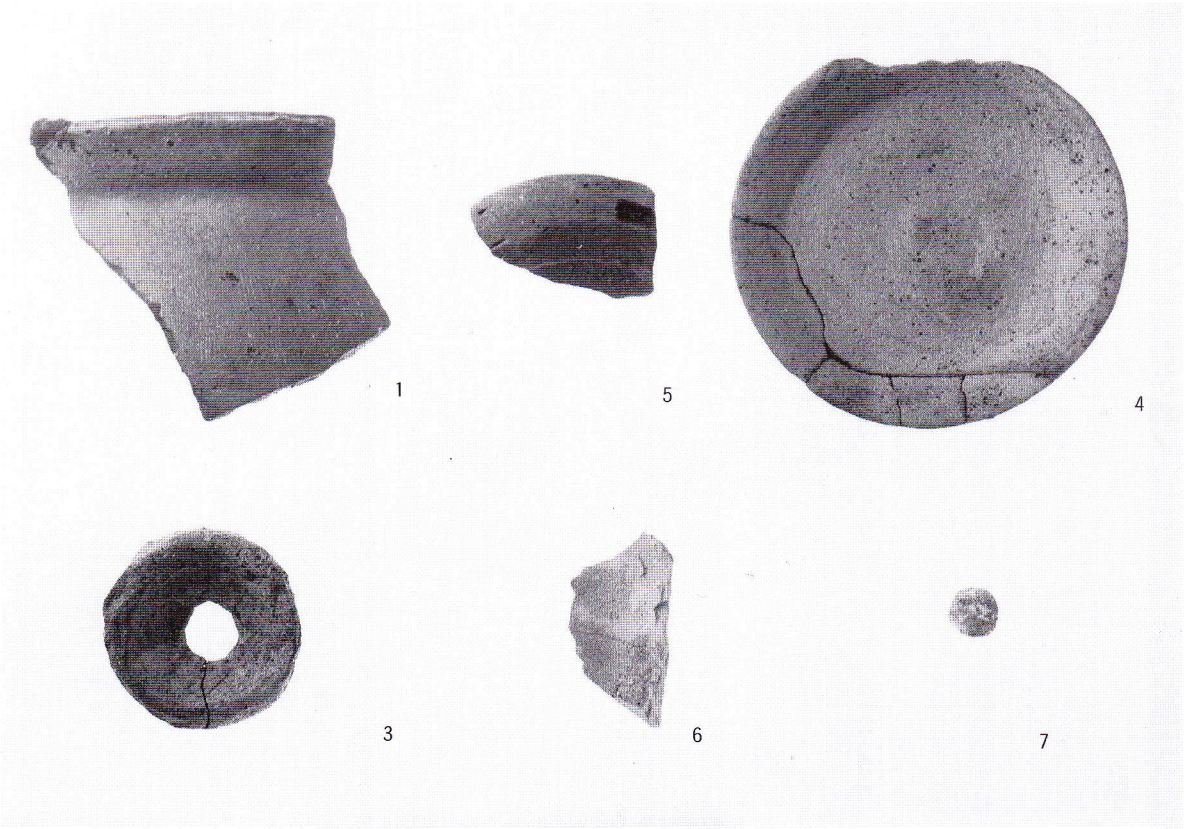
第３区 SD-18、SD-5、SD-20（東から）

第３区 SD-3土層堆積状況（西から）

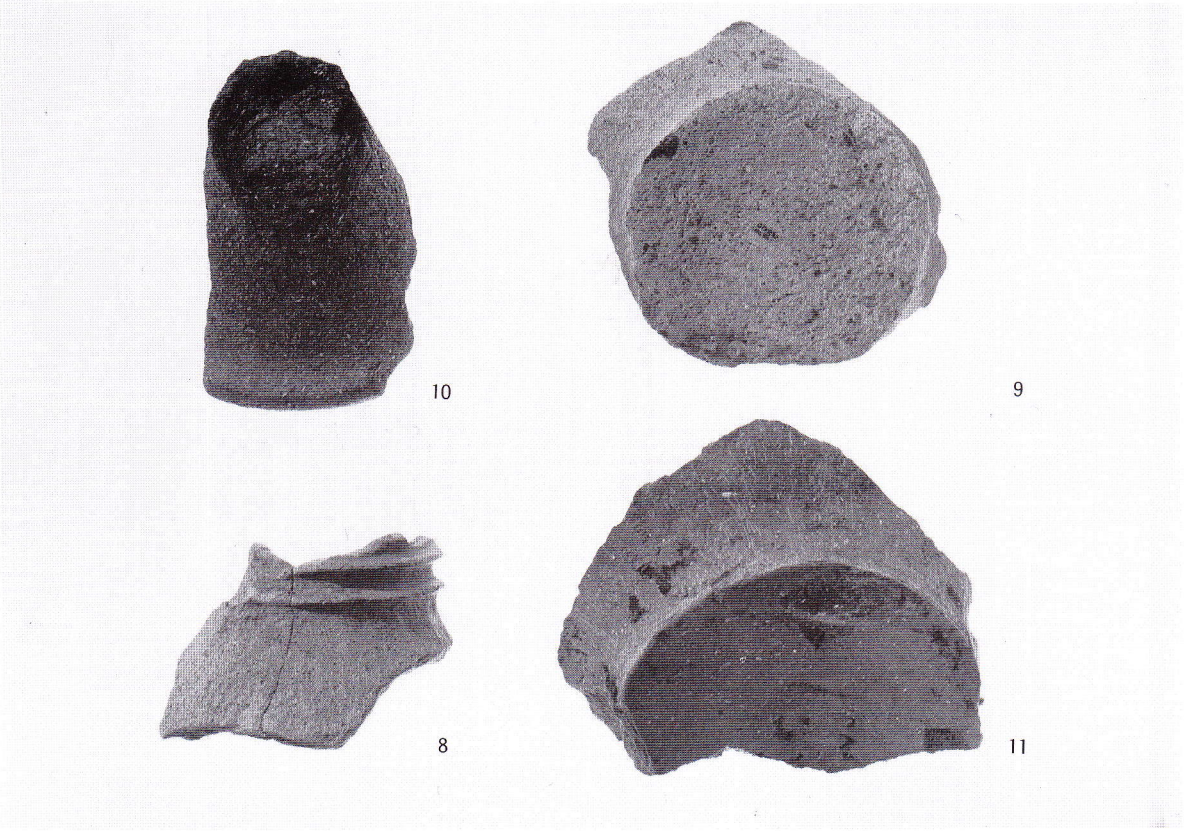


第３区 近代埋甕（南から）

図版16　遺物



第33次調査出土遺物 1•4•5 土師器、3弥生土器、6フイゴ、7 鉄砲玉



SD-8出土土器 弥生土器

12

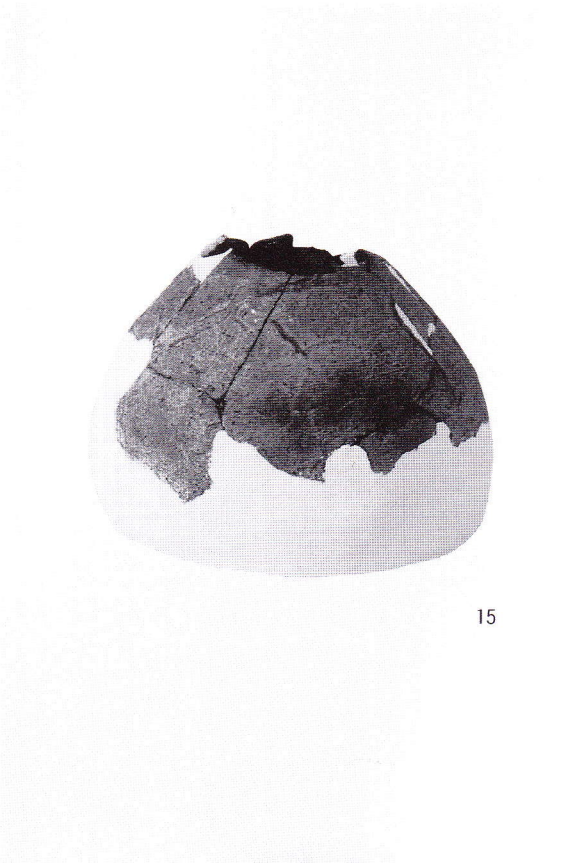
SD-21b出土土器 弥生土器壺

14

SD-21a出土土器 弥生土器壺

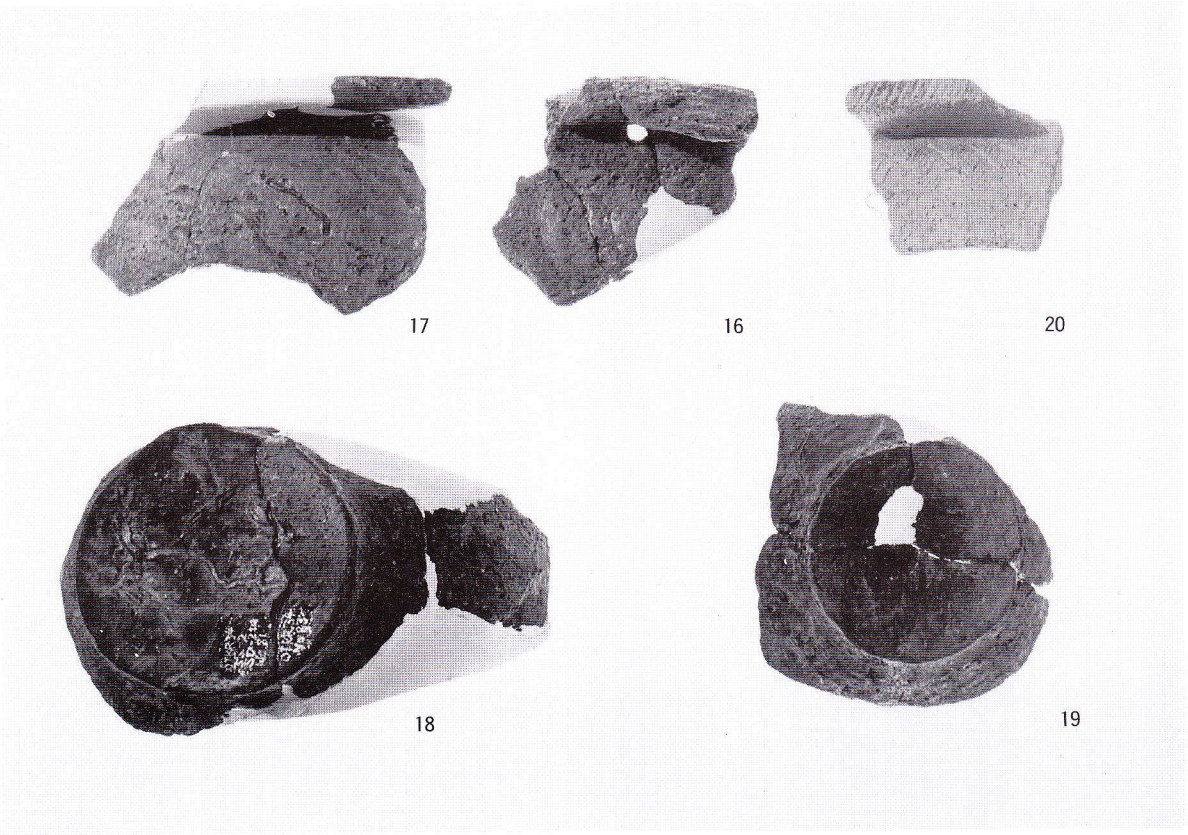
13

SD-21a出土土器 弥生土器壺

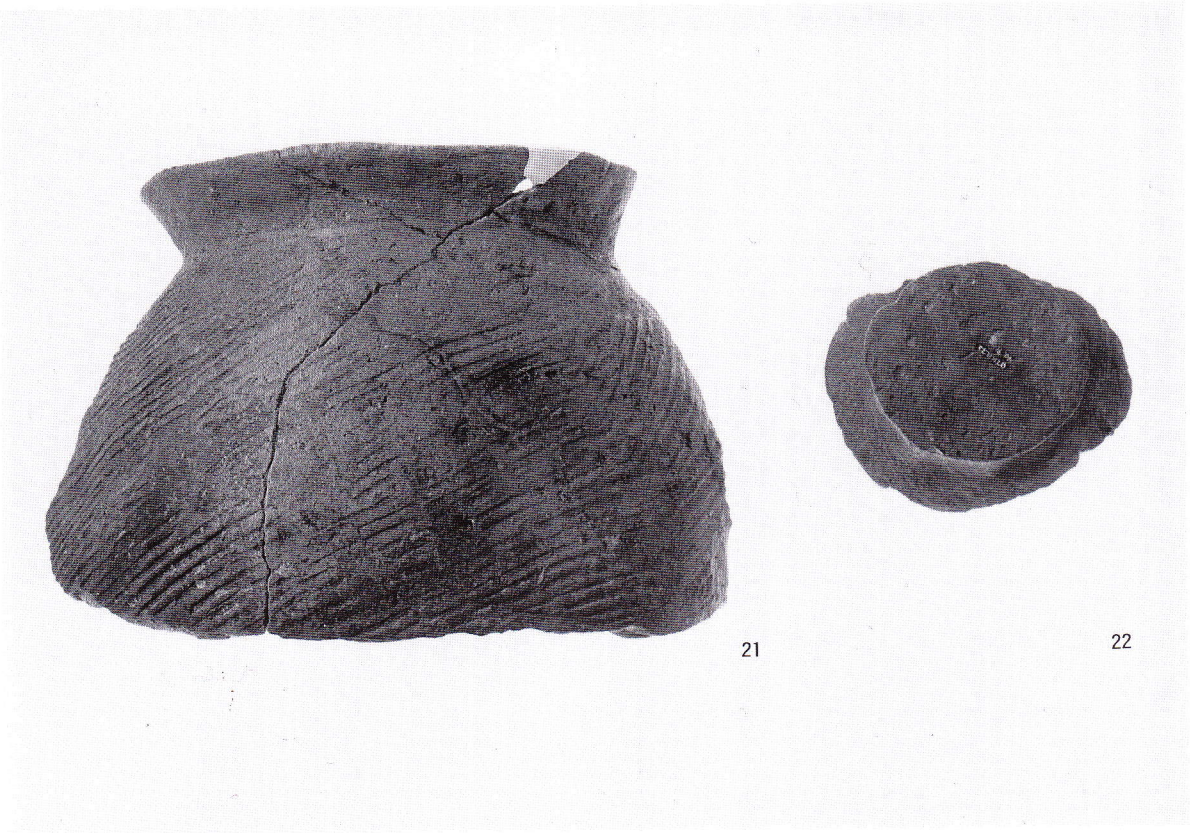


15

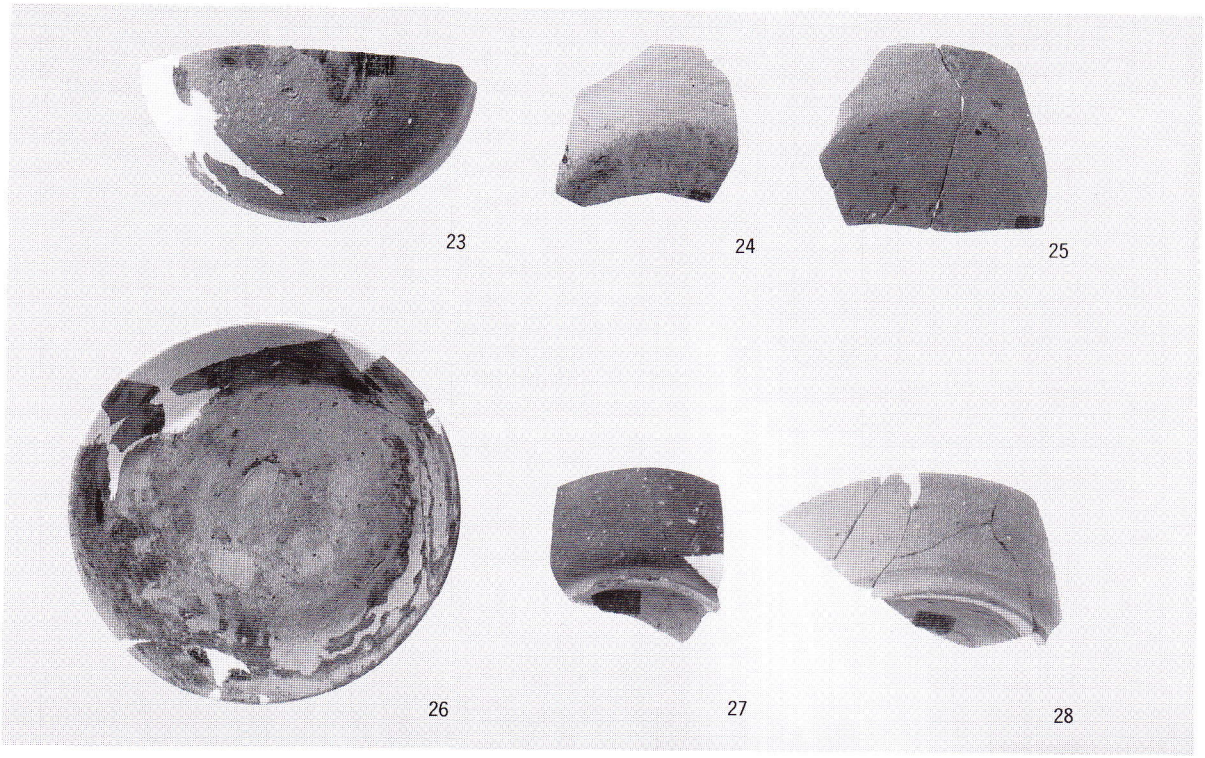
SD-21a出土土器 弥生土器壺



SD-21a出土土器 弥生土器

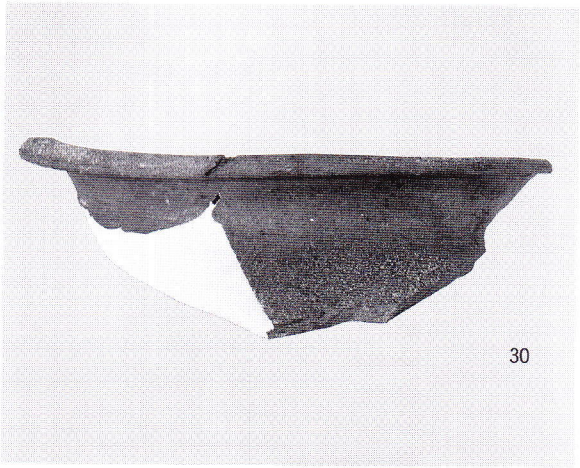


SD-18出土土器 弥生土器

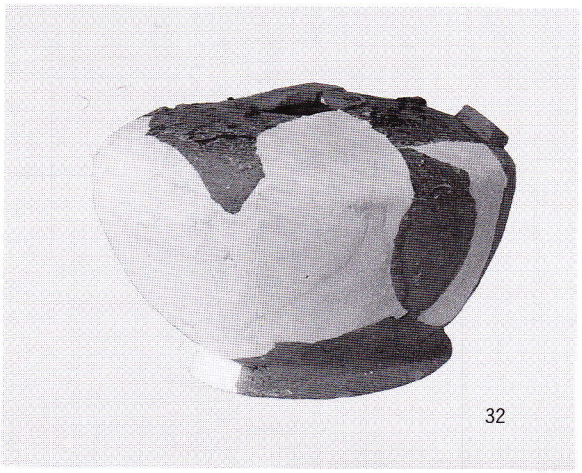


SD-3出土土器 須恵器杯

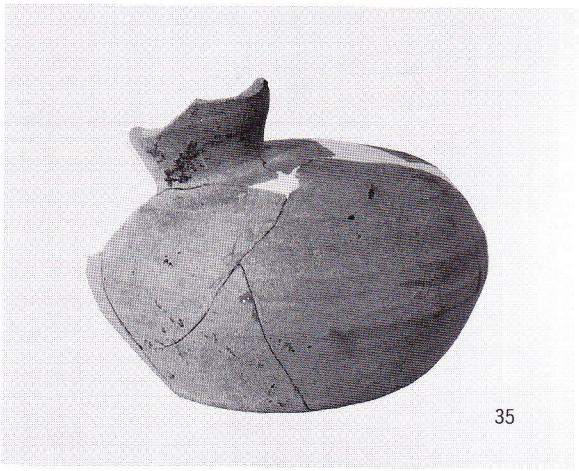
SD-3出土土器 須恵器甑



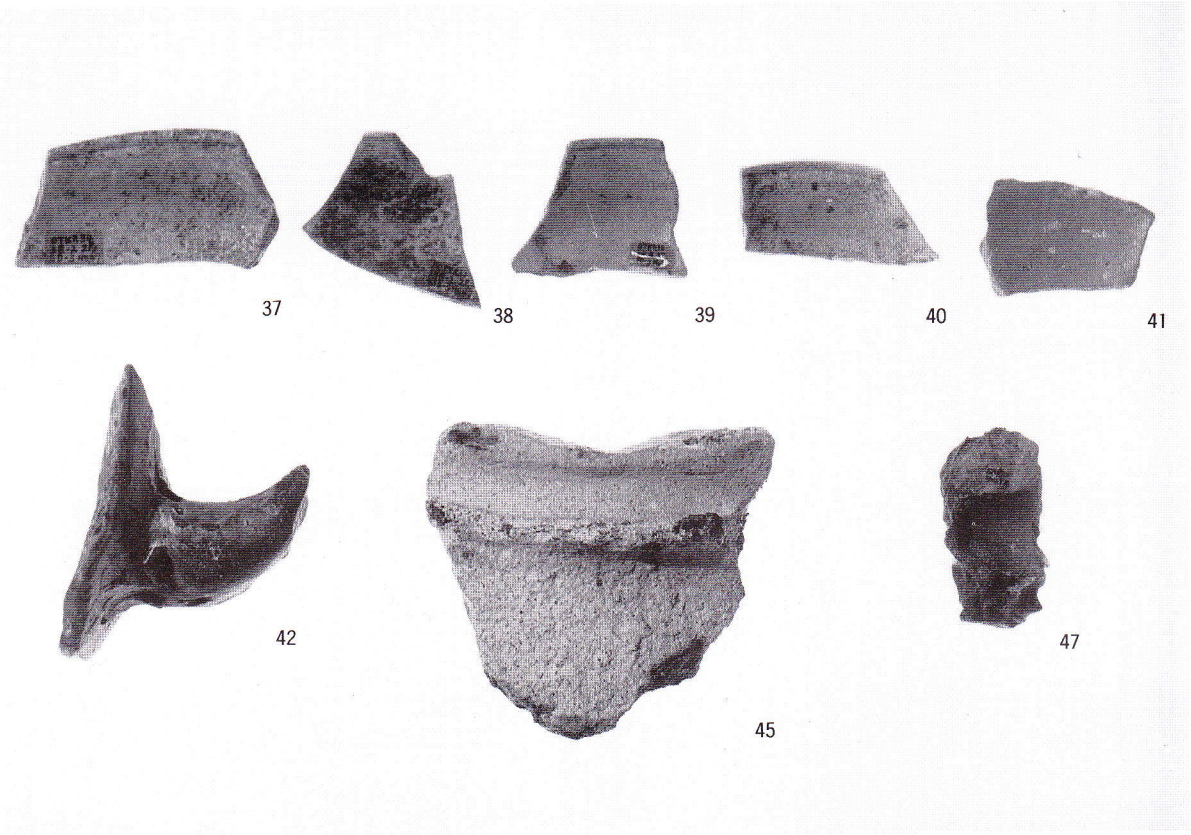
SD-3出土土器 須恵器甕



SD-3出土土器 須恵器壺



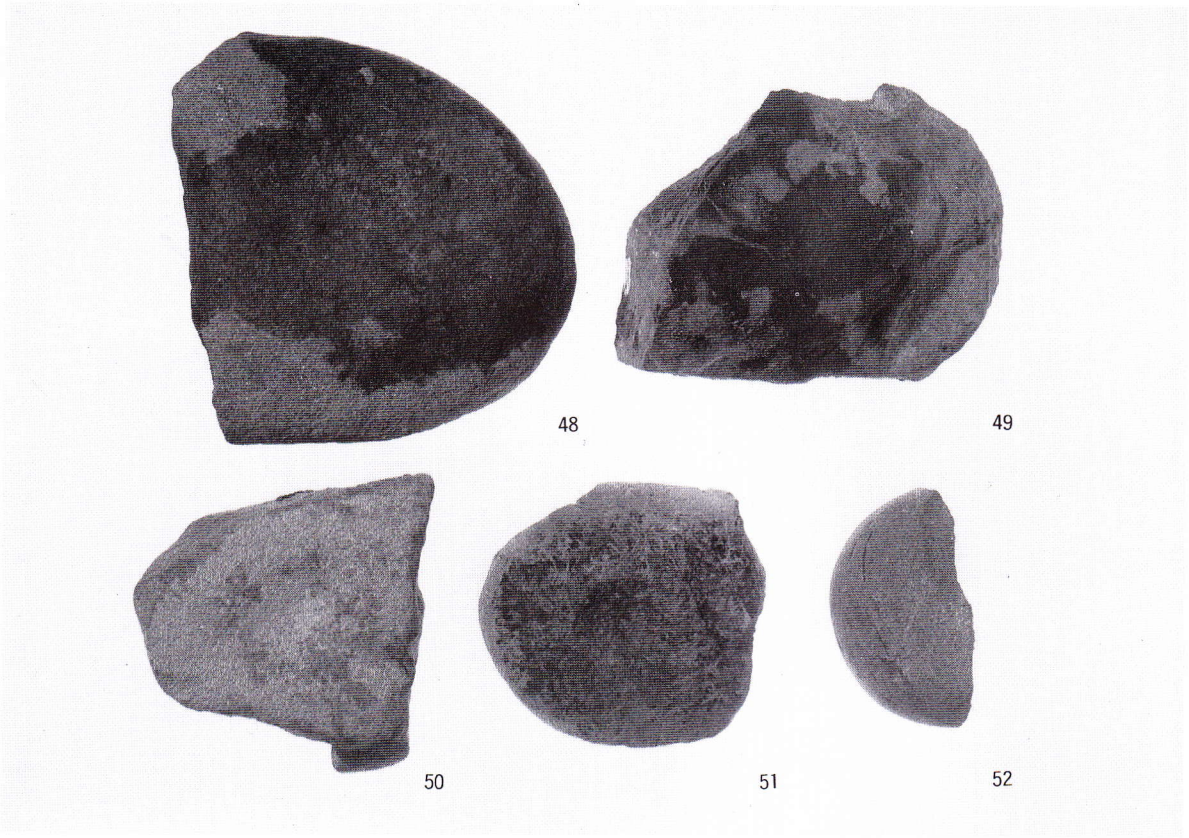
SD-3出土土器 須恵器平瓶



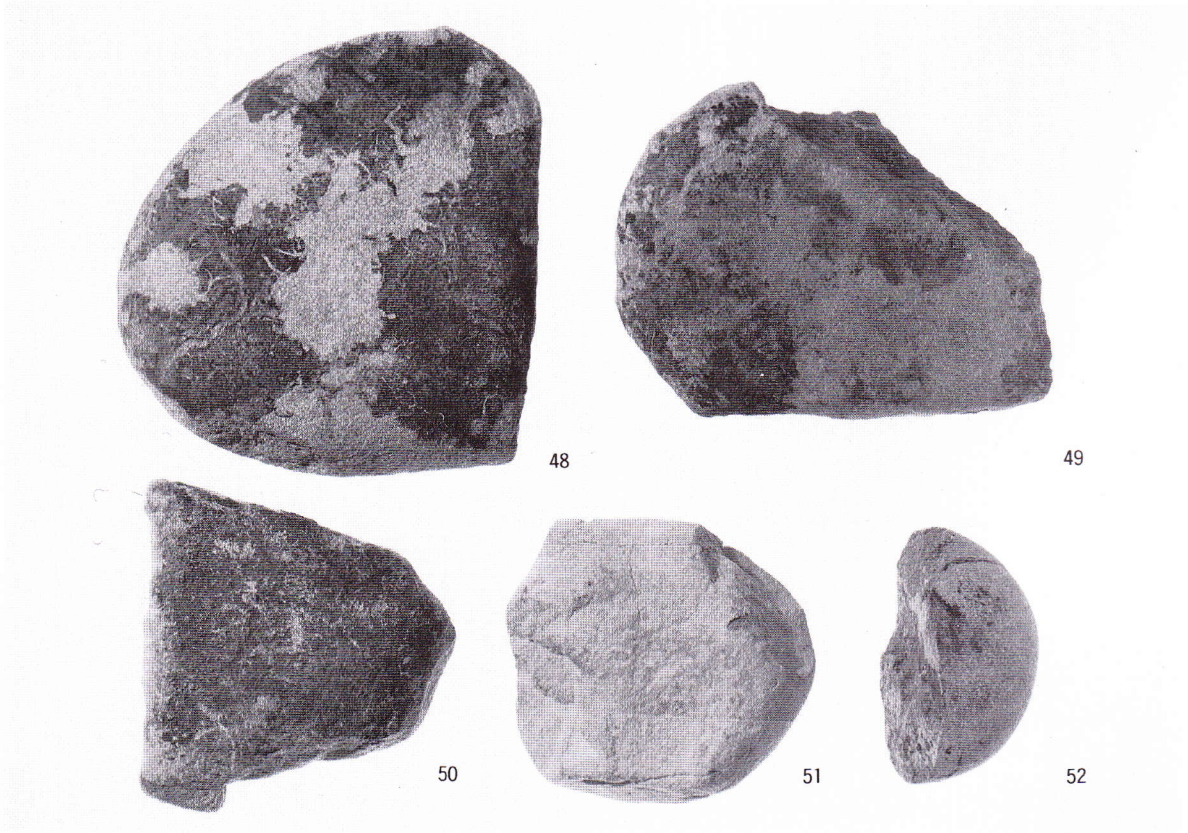
SD-3出土遺物 土師器、竈、フイゴ

SD-3出土土器 土師器甕

竈（SD-3出土）

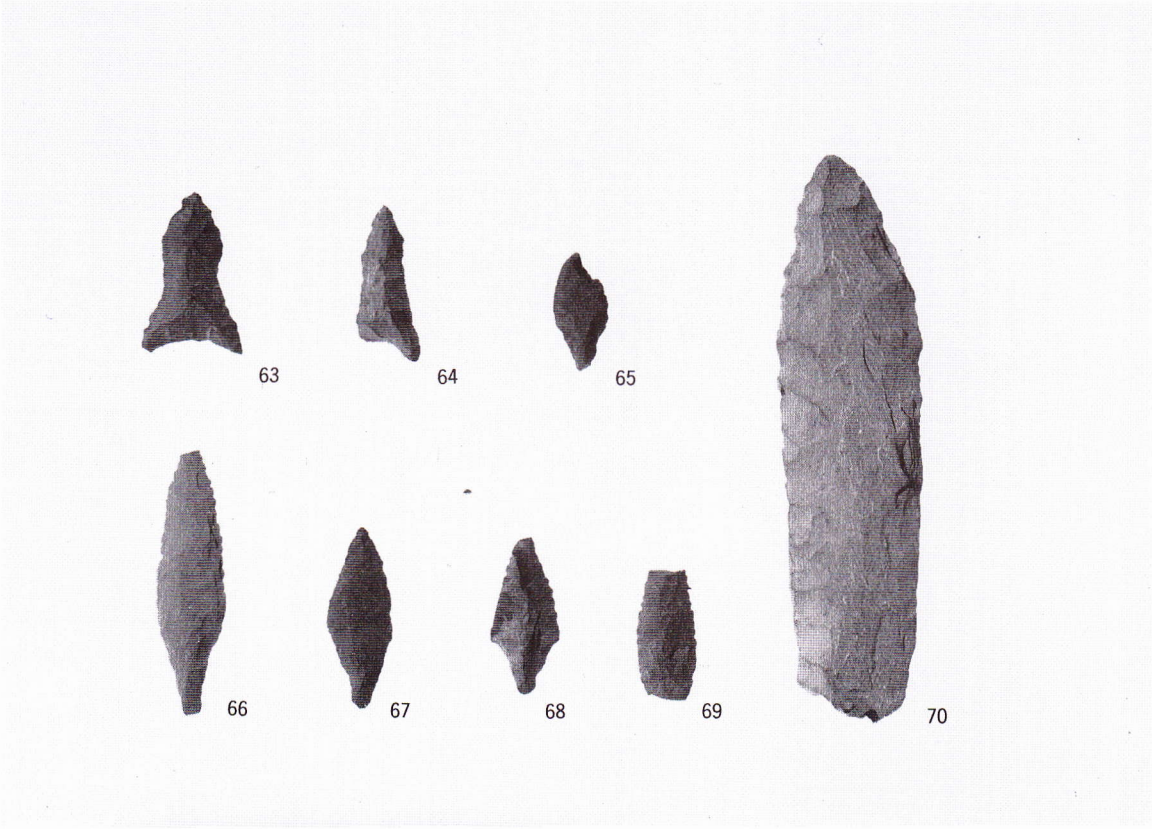


石器 48～50 凹石（SD-3出土）、51・52 凹石（SD-5出土）



裏　面

石器　53・54・56 叩き石、58・62 砥石（SD-3出土）、59 砥石（SD-8出土）
60 砥石（SX-1出土）、55・57 叩き石、61 砥石（包含層出土）



石器　63・64・65・67・68 石鏃（SD-3出土）、69 石鏃（SD-8出土）
66 石鏃、70 石槍状石器（短剣）（包含層出土）

平成８年11月30日発行

太田・黒田遺跡 第33・34次発掘調査概報

編集・発行　（財）和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　中央印刷株式会社

© （財）和歌山市文化体育振興事業団 1996